曙草帋

廿归廿 全

へ13
3049
上
6

特
へ 13
3049
6

大晦日曙艸紙

廿一編 上冊

京山翁作 芳綱画

紅英堂
發販

大晦日曙艸紙
おほつごもりあけぼのさうし
芳綱画圖
京山翁作
廿一編下
廿一編上
外題豊国画

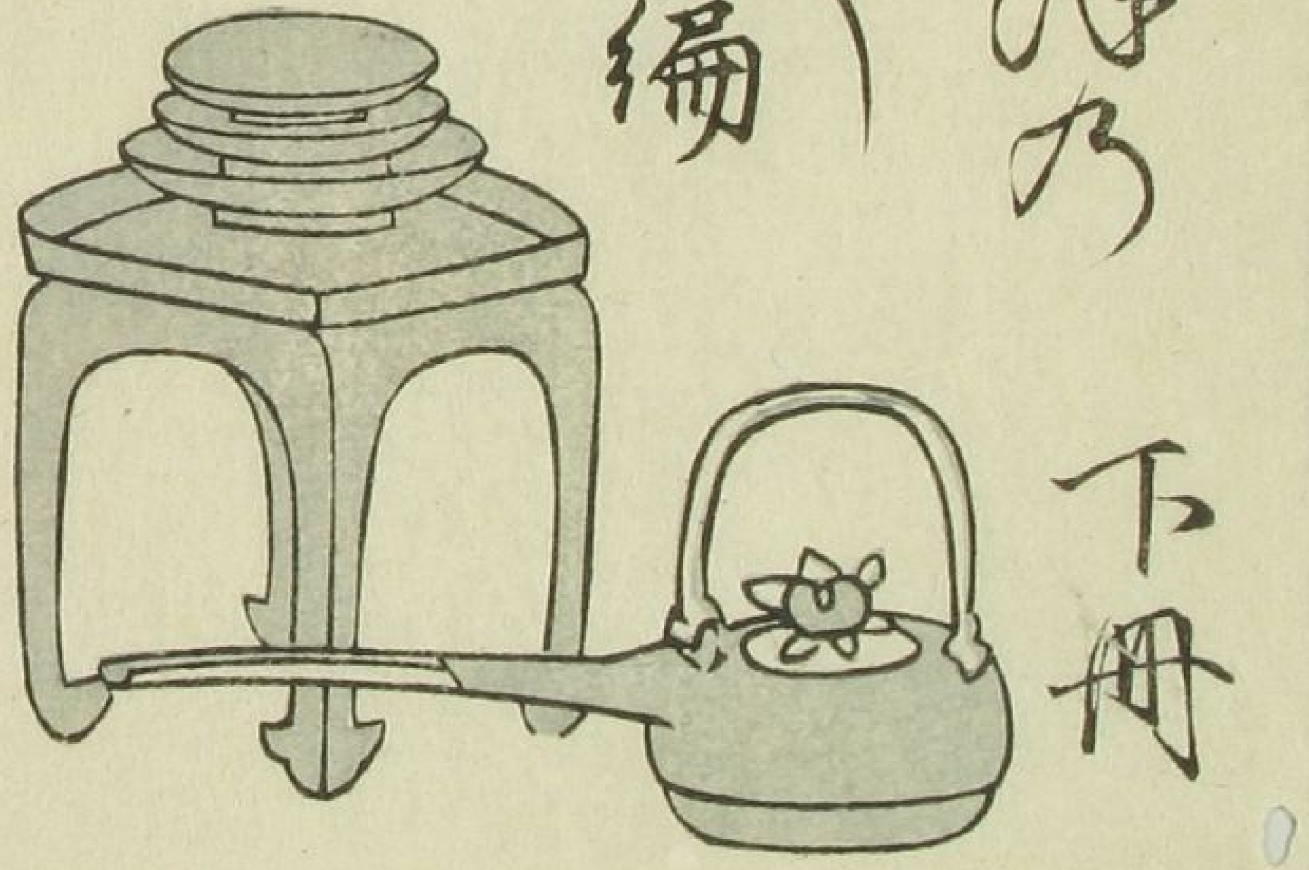
附言

大晦日曙冊子年々歳々梓木に開かせて既に廿編にいたりしが今年もまた梓主とさとりて廿一編とかけいだし大晦日のさいそく月ずゑまでといひのべつれどとまれかくも大みそかは短き財布の底をつくして暮べき趣向一文もあくどやせんかくやと金のならぬぞ種銭も覚のなりしも文章の種持なる学友訪ひ来りけりいとうれしうて表のくのよしをかたりて大晦日の種はなんがら四五料理して品のきれとりひけまべ友人もえらく翁がとほぼこの大晦日の作にむきかりし大晦日の魂まつりとかくさゞる大冊きもしは初春のくさぐさ冊なればいさかかくぎりしが是は雅の趣なり五段目の

大晦日曙乃さうし 廿一編 下冊

京山作
芳綱画

南傳馬一 蔦吉梓行



勘平なりを切て込こそひとく弁當をとつゝひ千念うけたる
お鍬もやど入て入れバ松魚のさう身あるて九十九で信濃
ののよのをたくさんやとくふぞんし御幣をうつく人
わりて夫の字をきらひとて四品をとよれんと云のそれを
師匠さまの我と表楽さまと六のひとはし州ぎらし六ケてそのそち
ますあゝりゐまくりてはらんゆあんぜのまうしとやいゝかされバ
翁が只京傳子がよのみなかゐ碁盤暮捉といふ抹香くさきに
外題をつけて酒賣の又六が大晦日の手すりに
一休禅師の道徳とあらぬ元日の晒頭ゐ
也用ゐくの禅機と示したる其よのみな
大あさりせゝふあらむやあの一段を
種として州さらしの大晦日ふ
作り入ゐくとすや実ふ忘
づきそ廿一編の大晦日えんりとよりきこへ

そくの種をとそうく借り出しね▲報恩経を
按ずるに七人婆羅女来る六一年ふ六度あり其内
七月ハあまねく人の寿命尽るれバも大晦日ふもひろ九ツま
まりて元日のあけ六ッふおよるはとさるくの経ふうてすくされバ甲首の
とらへ大晦日ふも玉子あそをさけてあさ祭をまつりしと
ときて清少納言が枕の
冊子ふ友讓本葉ふ
飯をもりて玉子を供ずる
事をそうり又和泉式部が哥ふも
よめりけり凡今四百年もゝのまへふ光之
うるは兼好がつれづれ草ふ見ゆ
さまざまなふ呂すぞとて大晦日ふ玉
まつりせをいふゆやあらん今の世ふ此事
あらへ坐敷の格ふならひて玉子あ㊀
福茶のそうそへかするはとさぞろし
掛とりのさわそくろをせぬやうふむかげ
大晦日ふもさことだちてつゐやそれちうさるゐ
經文ふあつて事あれバ今の
㊁繪ふうとさ
掛物ふてもま
まゝしともかくと

嘉永七年甲寅
六月朔日
八十六歳
京山識

大晦日曙冊子（おほみそかあけぼのさうし）廿一編

初段

さるほどに金田やたわらやの
いんきよはせがれたわら
やにかゝくれてかくまふぞく
ありけるがはまべのけいへいふる
あまりしをさとく身のうち
よろづにうけおやふ
孝をつくし目下を
あはれみつゝまるの
おらくもおやにこそ
たいせつなれとおぼふ
とも人のとちゆ
かるひ
身のうちたゞしき者
三せのむかう
さかめ〳〵ことの
ぞんじまで
そのうちくふうがきて　おかみの
だくさんとうきゝがおく
下女のおさん
七十ぜんへもむざと
火をあつかはさぬ
やうにすれば
まつ日酒で
くらしたるおかみの
たのかみかんが

代よりも上下和合
しそのよとときさかゆり
これすなはちその家の
あやかりたわらやに
人はたからの山
やおや神や仏も守らせ
たまふやらと
▲そもそも人のあんぞくの
うさむくそんふのその
ありけり不孝のものゝ
ある日酒の酒くらひ
大ざらざるの上
もうし此内でも酒に
のこらうよりも
やるまじきとおもへ
三〇代さんと
かしらせるまさうりまり
つくしむべし
さてある日朝や
まきてこんな下女
さつてたわらやから
むかひ日たわら今おもん
またいのやうにおつれが
おたいへ又むつめつ
かいちの中野村の又次が
ほうけんかこいはまりと
中そくれとや一升
たわらや一升もらく　又次が　右〔二〕

左次
さてこの
ひつ、おひの女
立いだけれ
又次たわらやか
うれもとこそ
あかりと
うれし

なんぞこそ
ふくと聞わく
だんなさま
いさぎげんから
お目でたう
ござり升
大だんなさまや
ご新ぞ
さまにも
おかはりなく
たわら屋さま
とおかはる
みなさまに
とれば
すぐと
ゆくのが
めどるのが

つゞく

つゞき 一まのく
さんえん
忘られてく
三歩ゆりゆりそ
とれらぜんとも
まのりいって
ちょふの札も
うちすてまる
つわりとざり弁
日なたへも
二とハ六十一の
あけがり
あとの
汝ハやまちうちと
ぞんじすりて
それとニや~もせがれの
又六よやのふところへも
ちいさおかうらへと世ひ
ござってこっそりらくも
らくをさせ弁
世名でとざり弁
それハよい子とのあつく
孫が...
つとて...
おかさをと...
よきのかのかうでされ

ござり弁トとしうけ
主中女房もともく
れ...のことを
のがる●なれた..すか
...
一りもさきに...ござ弁
川ござふあゆさこと
おもひひとたんよあり
あともやまれおかせち
どのへ...あひむつし
なかとの忠でおふも
あいで...
りうてんたかやちうが
つまのおちらく...
たへ...やる
おみのの...ふ
...
▲さて...又六がせがれ
又六が孝しんよやの
...
...

ふびんハ
おのひろ用の
たしまを
又ハやどくの
みやげハも
せよとてそ金子
十両さらせけり
ひとふのいたぶ
かりしハひつぶ
つまやし玉を
りぶけべつを
あり...傳ふ
つくりハ
ことかりなす
けり

二段
きのおどふ
又六ふうふ
たやまちう...
ひとよ...
おおひちも...
日をうさねて
とある山とちふ
ふとまよひ
かみハ...時を
らつけるも...[つゞく]

つれ元 谷ろゝの中ふ
ご存る一ッやは
ゐさり
やどある方と
たづねけれバ、あちらの
わきくさであるをて
母れく あるきい
どのとこあるが
ぜんたいまわりの日それから
さきは小川があるそれは
つりてあちゃれバあるく走
であるし てから
りあまり半道八日がそれよ
そや茶でものんでいるが
しゆれとくそいでさ
あぶちやはれるの
と一のさせるもいひてきませ
それわ内ふとしてぞきけり
▲さてや一日もろさむくふ

㊅▲さて又六へ
かくろうの
ありしとふ
やもふもあらそ
孝しんの
ものありけれバ
せうじき
中ゆもふさ
おぶらけぜん
まちれいと
あくまをありけり
▲かくてある日
又六酒のうみとすふ
うぞーろくり
かけ
さある茶とせふ
やすとまる
ワりしやとたとれバ
十四のとしより
二十二才がかく
こゝろだてもよろたる
たる佐々木
ろうらの父ぞ
からう名古や
山三の世がれ

つれておせらくおいのあー
つられけれへくまぎて表げりくる
下にたどよしきひら石あるをと
きてもうとしろけたもと
のおーぶ◎又兵衛「こゝまでどの
だれかうゆ千両
ワしありのみちでみるへ
めつておやれとくびゆうける
きの中より五両をもらさ
さんとまいる時ひろふ
あげりしくあざての中より
手をのべて又兵が
えりくびつかまさての
内へひき入られき若と
ひと三なる女房へ
びつくりさての中より
大男口ゆるさひふるゆへ
ぬき身ゆげんとるを
うしろげざぬき身へ玉ゆ
つき立ゆるきでし
周ろしきうをおきやどきて
ぶちまけあらたゆるて
うちあれをまなから「やてゆも
すとしあつくとん下くまへる
きいを入をさてくびゆうける
みかあ毛もくまの大男又くま
きゝへらぬをとうくしーね ㊀

㊁○山三へだいのぞ
小ぎう仁三と
らふの方のまわり
のちの母く云へ
下のまきふ
まるせり

三段

それはさておきこゝに
河内国さぶの日と云
中の村とらふ所に
酒うりの又六とて
歳へ卅ゆ五ッ六ッ
朝よりひそく
ゆろ久ふろり
ゆろそくを
ありつくかせぐふ
おひつく
びんぼうずく二こ
おやとも
らくくと
中よくひけり
こ母まやれち
だいの小ざうが ㊂

㊃たわふ
たびちのつなと
そえくろ又六が
せがれありつまも
おきてとよび一子と
杉本とのふと一
二三才なりけり ㊄

久しぶり
めでたのそれだが
まそ三年へ
ゆつともそちゞのを
たづねとてきた
きてりまり
小山三 又六
小山三さま
これバ
たびの
おすさ
お供も
あくあさて
りく
かくめ
一日ある
らぶ白く
すぐ来まて
立まりて
こしもて
小山三さまり
けれバ
又六身し
かる

つぎへ

（つゞき）合せしき夕ハ中どもで
くどうんあらおそくるし
くいゆどもはあやまりひ
やさんとてさるも
なり入けり

四段 又六がつまのおみつがひとり
やどにありてそつとぶ
うへるところなれば
三ツになる杉太を
ねかしつけあしきを
とゞすもと
すゝしくや
くるしきそのあるじは
あらふやりたてのいもへ
すゞきをつくられと
つちみへこえぬかれのや
れがやかいろ白くんぎし
さへやからまりけおとミと
の又六一村へござとらずふ
すむひとてあのいらしや
とゞらし竹ヶ鼻へとらふれの
むなれあのしぶておやちくヶ
あるは日酒らへみきこやし
又六がおおは孝しんゆく
あり日びにせのそひて
友だちゆも美なほんありて㊀

㊀男ぶりもよけれバ仲立をもとのちくヶ方よりのぞみてよめらせるなりけり

▲さておきミや小さん三を
せきあひてやどへ入り
むらしのあやしんする㊂

㊃身をくり
けれバなぐて
よきおきミ
なさとがあつく
あそびけり㊃

㊇世にたてんと
くもでの方を
すどめとし
かへだとけん
おかしく
せがれ不破に
あんぎるれん
なにとあらせ
まずいまず
きゝこの
此身を
くづ
さん
とて
二年
いぜん
まり子
ある
ふだ
まを
を
身うけ
して
おかみの
とぎ
を
させける
ふ

㊅又六あとりと
是まで入りひそもをとめてとくを
ひそか小さん三ふむひ
是やどよりもてまぜ六あやくの
道連がらけ供もつれ
あへだきこまするひ
こまりへ
きこめて
こけぶ
とぎり

ま
せう入ぶ
あらぬ
ワざし

あざらかは
よりて六匹ちから
かのあやまりやさえ
やうすとをとよらせ下されまませ
さん三ふし一げふうちへまいるべき
むかしふえ ふられそちぶだいせ
くらびけあのこれ中しきまを
ちくる事しうその方さらば
ワざまこくらの殿さまの
おくさまそふのまくの
うみさまひし月ワ丸さまを
なきこのことふしせん
とのへ江戸やくものうこの
うち子ひし花形丸さまを㊆

けのあらも
悪人
ならの
一味と
ふきえて
ワざと三ふ
しんしやを
きとめ
此分を
もぎ
させ
これまふ
かのへ
よう京
とのうち
ぞらへ
ざんげ
しても
どれにさけ
られしも
あまりあり
ワが父
さんごえ
きのひさ
やるる
あまぶ

つぎへ

馬ふくら薬
五段
酒ぐら 又六

（つゞき二）なんとなれバ玉ならしと
けふはきて入みけるさゑりしに
すゝきの中ふであつらきならバ
人のとがめり又六はひとしく
たせよりをれバとへにそも
のりゆ女房おかにたとがなや
とがもひ竹也がいひとしたをうまて
あけゆふひとを四つ尾ひゆつてあれ
ゆふり又六これをみてどこゆう
てんかし竹やをひとかとし
みゆくちよせよおりしが
きうしよの二玉のを叶ふべき
むしのいきさふあらそひけり
手はやを女房のなかあれバ
ざやゆくれるそこをなおきり
ありおりくとひをあふわくろうちもと
とりなんしまをとめ口なむな
りくえ　さて　あとしるあんもと
久て又のかわをあれしゆゑとふ
あるかとをこれひさてたけと
りふきのとれとよりおもいてるも
あり又六ひとりとこゆ
「さて六本の子もなさらん
とそは尾花の中ゆみえたと・ゆへ
ありてワが目ふみえねと・ゆへ
あらそ女房のおやをと
うちたすへうるりんくさ

おれがものゝかねのまとてくせの
りんきバかりとこれちくおどの
あやまちとへいのひとあがら
おんみをうちとやよこ三ふ
おんとのびみがのあらん
又六ハ入ゆのれ時へ
おやうとところしの大きのゆへ
木のうへふなちをとらへまうり
めとかくぞーくぞろかうなそを
白うらんとれかのひぞれどなゆる
あれしくわめくらふ命をとをつむ
あらそ命をおんみふあゆけなくあり
そのうちハワがやさこなやおんみも
あるならくたびかありていまさ
うくらそはあのこうそはせを
あのびみがハしやおんなをなまつ
おく百あみがふかあつしおきてる
どとてなりをなさこなや
くくらまなるそ
なんぞうゆと思ひ
とまやしにされし
あさのゆへとやうる時の
本はおいあの光と
中ハおいるあるのの
やあるま紙をゆりて
小きんこさきまきとひきさ
男ぬてのちかこの人
とうくとのひきのせられが ㊀

㊁ ふかりてあのゝさくさきをうこあんせお身がうちこそおらさせやさえされバこそワか命をおん身にあけまいらすあり けるの二ツふくもしのそりとあら売れハめとまり

ふことまでもあらくのそことどうまへひまし神や仏にもちかひのたねワれハ身のちまのそワれ又おん身にちとのまぜやさえとちくさうたる小口きざしゆくちくそこひきそのちをとちくえが口あわり本来しなろうそなしかさり ㊂

㊃ はさ九木そうむかの尾花のあかの人へとえなどすげ十二の二ウとけれバ又六うちかどろきそありとめとて

つゞき

(二)[illegible]

六段

又六がつぎの日[illegible]

(五)[illegible]

(六)[illegible]

(二)[illegible]

(四)[illegible]

[illegible]

七段

[illegible]

次へ

おみせ
又ろく
庄屋
七段

京山老人作 芳綱画

茶をわかすつく京で 昔からの水をともにむすびも ともありの茶がかくあり
らうそくさうじて
水のきよくだいのみたく
あかりの茶をとりとして
くる人はないござる
ちくさが茶でけふあどりわろの
風なみわりうちよとあのむすめあり
座敷の子の中ず一札うくる
うく又よりさうちはきる袋を
よき者おうるも娘人さまんの
中へ来る身にゐげく
むすめのおとこたせうけ
とさきさまありがたうと
おつりまうらびきうおを
それとともにきつよりふとん
木綿のけちくすぎ
あまがわどるよりつるつとなく
甘草の下ぶくも太夫の心
ひとりの心がござる
又六つ事のたる言ふさうくみやゐ
やきがねさくるおもひやく
むねあてこそ事を
あへせなぎりつのうむ多す口へ
むの内をとめくさる
子がなかへやがてあのへ
今へ客かんぬとと ㊀

㊁こなひとこのむすめへ ありさくおりなり
▲これより座敷へくるが あがりいけ 野原ゆく ㊂

㊃ たくはけつる人おりて 村へ来る世の あがつくうりく 言ひくれがゆきひらうへとよ すてを ぬきがらをとらく ひとさとで 又六とおとと ふりひさう 行すりて しられぐ あるさまを

大晦日曙冊子廿一編下の巻

人の娘の 常のならひを あるべきを さるべき 山の 名もなく やまちがふ 月とちぎりて いづる むさし野のそら 京山

あよのと女ふうすつれ六 ちぎさうたの ちぶさ女あふのためで 子をやしなふ 天だうさまへ もうしわけ そぎされたる あなたなり されバ二十五六ねりくゝり 月やくの花もさきさかり 子をもうくべきことなるに りこれバちぶさかくとおもへ 天のあたゆる道理なれ あるゆふよのへわりしても そらあめのさゝもおきとへ 天だうさまのつくりあひさる うらてりの宗どもふう たるといてさうもあかあり そのたるをとひとのだして 子だねをおどしやまらうふうを あとしゑくあり江戸 京ばし銀座二丁目京伝みせ ▲男大ト女くすり 女さらみ薬 ゐくへゆんたん懐妊丹 ねりやく一包五匁半包 二分十匁男へ六十目女 すりとちおんせんワきさふ まきる女へ中へとさりとも 目やくと西へむさらむ か合ありくさーくのうがさ京あり ㊀

▲十三味薬 あらひと まわしゆうくわん 水晶粉百三十二せん ゆうおどのあれもあり ふで一度つくべ れうらおくして つきもでもあかうの よくのるがり うけ合あり常に つるべれうらよ あるやうらず ・やけどにきさも ・あさぎやけどの たびつくるべ いゑあくる

▲むしむし一包薬 さんごさい 珊瑚碑 百せんいろく しとさう きつぶ用ひく 京伝ゆく

八段 さるほどに又六もあとにのこりて我を
あはれみて日野のへおかすのあるがく
して又六がやしきより一とまづくらく
まづむかひけり▲さて竹才へ
ひとりの女あかみせの枚太を
つれて竹才が父のまとにまゐり
又六が家どのへ入りて名どのふ
小さんがのひまさうをたのみけり
▲かくて竹才そこより三日目の
あさ庄やのくべゑかたより
又六をよびにきたり出名
又六竹才をつれてきたりしに
くけころのまへひさまにかけまへ
庄やのくべゑは又六やとおめひ
しかるにせんとおりかくやうけるに
庄やのくべゑ又六と小ざるときへ
つれゆきてとくとさそひてやがて
こゝに一さく日の夕方
たれさの角べゑより
王田の原のあとりのこ
立よりてあかうも金
三分のおちゆとりくる
おぞくありやとのへて
又六さてこそとむねふところ
けるぞむかくこちや
あるかれどもしてものゝ〳〵

㊁かさ口のとをふくあ
めいそくあらもちや
又六にそくおちゆう
させるうく
あざくうくえ
でそりうひれ
そのえうく
どらもし…
ひんくのとやらお…
これ二りもも
とさらりの
そとどの
身のもち
よろしく
又竹才も
ねたがし…㊂

㊃人あるとき
子をもちける
女房のおやなれ
ひとりのつききもの
とあるしる
㊄

○又六「ひのみもさきりにて
ござり升・庄や「これは
つまくさうやたぬきの
角べゑさまりてやは
一さく日ここにて
王田の原の
あとりと
とゑりし時
ところの
あとさきて
しやる
あつまの
やうらあうへ
そらぞてちう
うちやへ
あたりといふ
かしくちう
よりとも
又六あり
さまされば
竹をもうち
とらしうれ
又六あれば
あたり立へとめんじて
ちそうびをとりて
ねんのこめおとげとこ
りやうおるそのまゝを
せんぎまする庄やのわく目あり㊀

㊅おうれどもさ
きりおぶうて
まうもまちふ
とろくろ
つぎへ

つゞき その時のゆゑれば角べゑがやうすうかゞひともりてゐて
おかれあらばありしよふやせといふこゝろもやるされける六十一の庄やが
ともを又六へ竹次が
まどひふむかひかさる
ところもあまたべ
かくとをきこえかてまいるも
いりかゝありしかども
つまぶふのひけれバ
※庄やあらかバ
きてそうえとして
うちもゞ尾花の中ふ
さてたのみをとりてわるる
竹次ふあつりしとき
わうさまのありけり
たるもてきの中ふ
わるる竹次ちかくとも
そざうんとさきら
どや目ふへとえぬえず
あやまちとて
やのあうさえおやゆ
あまりきさんとさざまり
えどまへのめのむやト
ちぞをしてあんそを
又六もきうらむき

その間ふおけりふ
これこれよも忠孝ふ
ぞはふへいぶやあーと
んのけりふあやまちとて
いひたのうあやまうと
きしの名をふあれとて
いかなるんぐさだや
ふさおやの名をもけがし又二万両
かくまひやふさえふさまの
おみのなかもちもちおゝそく
おゑたちをすもおやふの
杉太もふびんありと
おとぎのあゝくひざそねら
庄やこれをうたやまるに
「又六とそのこゝろ一つの
まつぞれおりひつさうその
又六のそふんしてゑびそ
くさきるかあそむざ十メ文あり
その六角べゑふ金子二千両
おんみよりつみもさて
これらとあんの名
あてゆて角べゑが一札をとり
そのりくうれ又六ふ
うらとあるも竹次を
てうそうふくうちてうと
あとつきもたきこし
やゆ阪あやまり入ゆトふふ
文段ありう見へよくあるも ㊀

やうぎ
二千両あらバ
とくんまつ
ひかぢ女ききあり
おさとの
くらーふてふへふ
二千両のそかくれ
りそききいつれ春ふ
ありくあさるべ
ねんぐの
金子つうにそうと
へ大晦日までふ
まそくしてくー
ゆとふひけれバ
又六ひれば
ぞれんへ一代のまされ
いまトいうふも
大晦日までふへ
さーまうす參ーと ㊁

▲きてく庄やくのゑ
べ新
ぶまをよ
まうじの
よしと両千で
せとけれバ
うゑるたる
ねおかわり
ゆわのき
ぎさあ
そそ
とうと
さま
つきて
ふるとび
庄やの
うちたる
一きろふ
りんぞん
まとめて
又六ふっさー
けらで
又六へ
がりつる
あゆひと
まちがり
▲とそもく
庄やく
べつかる
えあり
るとさて
たさけ
うへ日ごろ
又六あさ
おやふも
まうちきたなる
孝しんふて身もむ ㊂

むねもとまれて大ふよろこびけり

つゞく

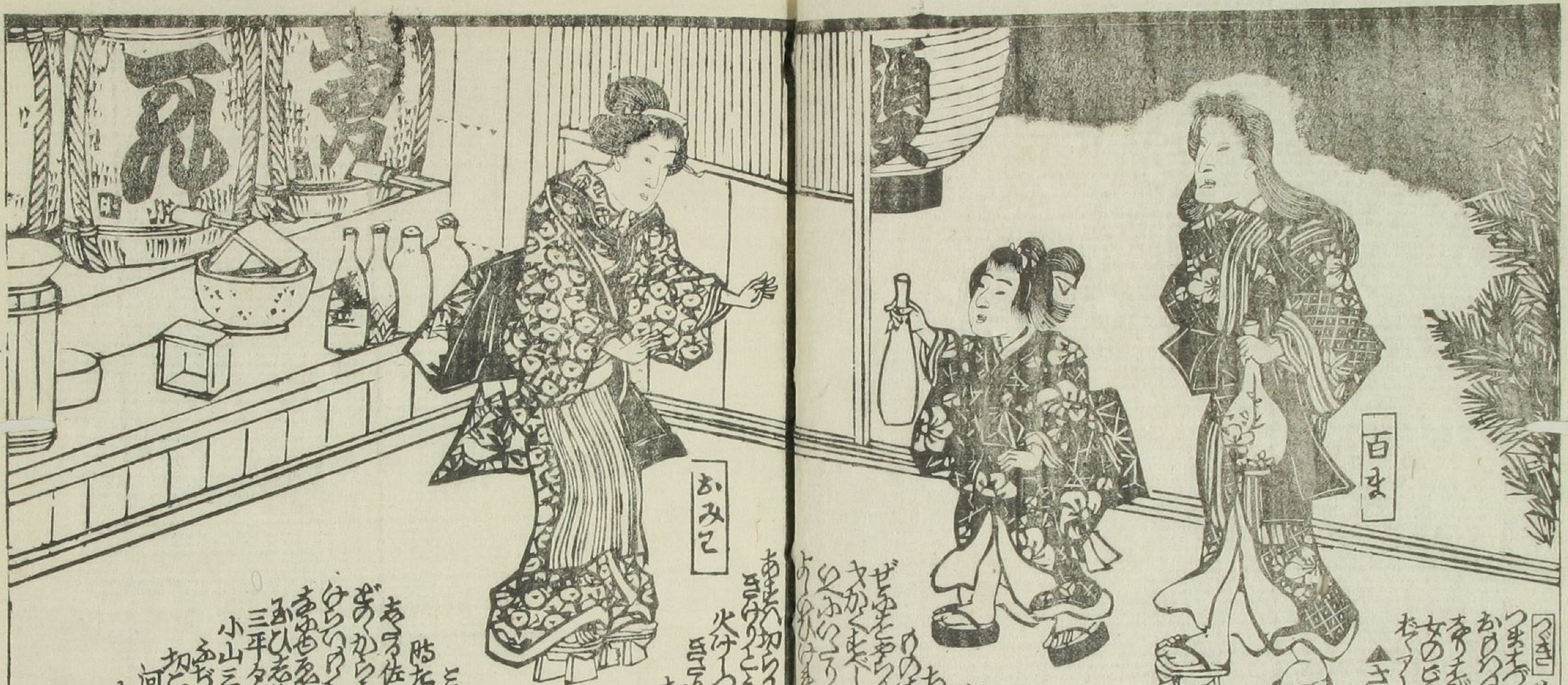
南都らうそく
又六
白拍子の

つぎ ね[illegible]
又六ハ天ぐりのけあく[illegible]
[illegible]山[illegible]
[illegible]
三十五日[illegible]日又六[illegible]
[illegible]時
[illegible]
[illegible]時とある山寺へ
[illegible]河内の国の上人

[illegible]
[illegible]九月晦日の日
これより[illegible]
谷川の[illegible]
[illegible]手形[illegible]
[illegible]
又[illegible]男へ
[illegible]
[illegible]又六[illegible]
[illegible]これより[illegible]日
[illegible]又六ハ[illegible]
[illegible]日の[illegible]竹[illegible]
[illegible]火の車
[illegible]

十段 それハさておき又[illegible]村の小川[illegible]

つぎへ



「つゞき」花のおもかげ
つまもつれさしきを
おもはるれおもを
ありまびともあまく
女のしろきき百ま
おもアーとよみまけり
▲さて名古屋小さん三
此れぞよりおびやうの
づくらぬかりてしての
やつきやそよのおひつ
合せとはけりさてある日
又六村のよりあひふ
いそく人の末ち米をを
さけべうこまるれくる
さいゆんのくびを七日
まつりて寺へおそむり
かいこそ方の村であやつう
まれべ一つあきうつう
ゆそもそのわれを
きるとききておうひ
けるへの百まへ
ひゆかの村の
ちろくゆすむ
りのあれかれふ
ぜゆをすらんとてむのおべ
やかく米ーとて百まが
あふって力あつくの
よのひけきべさいまいあり

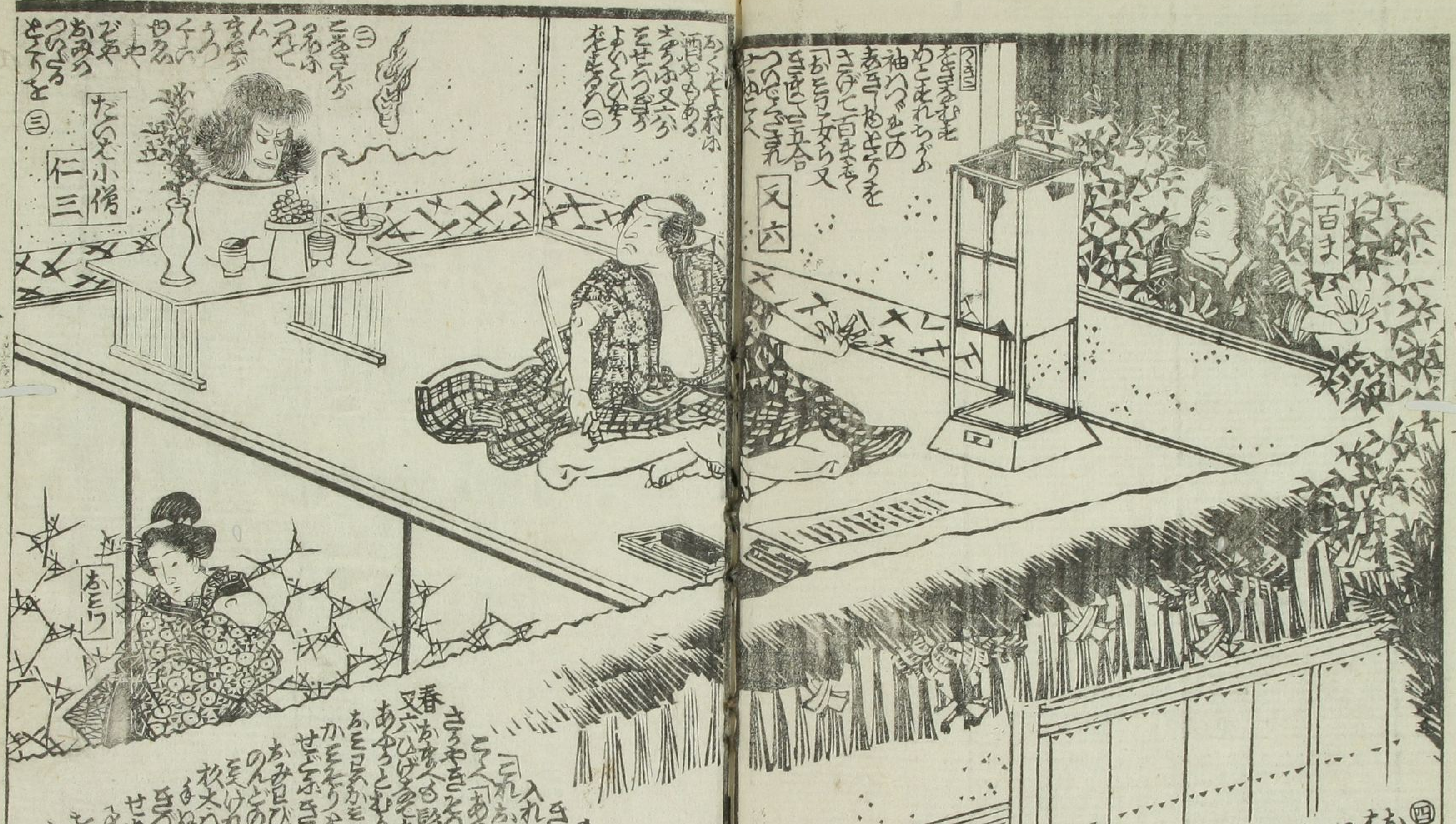
㊁小きん二ゃずりゝとを
あづれととて此國へ
きこりしありとゆひ
けれバ百まさんざず
とーろうらかれつきまを
くらつくたゞづね
三平がみくゆ
口よせおゆう
さてやき
けれバ三平
うまづき
「よーしく
おのーが
わあてりふ
ちがいあく
とくと
アレとやけ
口れはありきべ
たゞごとのまもうぞ
三千両口まへ
おそのことの
かんねーし方がたつぶかの
四よまやくなり
たちがあら世をすまんぞ
久しーぶりしやまく
いまひふとてで一大の
やらんとて[illegible]
つまきそのくびあり

あまへ加らぬざいゆんありと
さゆりとうゆあひそのある日
火げーつおくびを入れてかち
きこりしめる百まかぜふ二千りん
あてちいとりひそかゆまうり
おきけりとれ今十二月廿三日の
ろすりけり▲百まかあうろざ
二千りんのせゆをえてその
ある日の朝わーしめや
ふでくひ酒ものそく
ぬぐる時百まで六
さきうとひふうれを
とれべとやとゆありし
吟たびく酒のあひてを
あう佐々木うらの次
ずかうちふへなうけりが
ひらいのくぐの三平く
きかおあとてらく
あひあぞとたづねけまへ
三平名乞わ山ごうぐさわれ
小山三せのてうあひあふ
ふぢあととャあてらけを
知ところちくてせてぶ此
河内の國ゆかられあり此
小きん二千をいけおいておやうず
たねまぜうけきるまち
こぞうへのでするおあるるる
されどへおゆ世存られ㊀

ろいぬざむらひ
こられてやどく
くすりけり

十段

此日今十二月
廿四日
歳ろとても
ちろくうもち
よせて大晦日の
日もえやられくる
酒とせの又六が
とせよくけたれども
たゞよりまでし
かとうへとせの
あききすのひたもたまけ
甘ぐされうひぐ一く
「表てまとわをよう
つうへあうさん也
あふうひあとこの
ドやへあへまきまん
あきさうも二合
くぎさんせと
くらーも去れと
びんぞどうぎり
せぶろけとりと
ついでやる「つゞき」



つゞき きまうむを めとまれちうか 袖へつゞきの あきてかとくりを さゝげて百まで 「おミち女ら又 きせと三五合 つのでぶきれ ためとく

四 すてす「のゝも おまつりで かあそこ酒いられけのお さだ女のつまでもお豆で どまきこせ「あのく豆共 きれどもかくミへだりく どまおやりやとりのうく あくりのミすのかへして さくりをきさげて立さり けり申ぎどもあれど 大三そろよのひゐへ 人の内あけりとも 時うりて大きに匠く 立ろうあったり又六 あくの方をかとび さうして「おつゞうへ だうしや・おミ六 「はやくすとし つまされ字で まくもあすこさみ まきこれまさ 「おことぬく まつりて おくあの わびもとよ 以八丁ど まん字あの 七日九ツの そときうち寺へ

あくぞよ村の酒やもある さかふ又六が さしせつぎう よいとひまう おきさきへ 一

二 ござさんが名のふ つれてム まうがうろ 千ゝい やるや ぞや おみの つゞる さてりを 三

めでたき正月 むらん家をまれが ようにぎえさあまへ 元日のあさ「いあの まつくび「めつとたどや のえやこせくつと府んと さ大ふりたちくるそり出り 入れとせをあがまり三ツ 「これおとこ右かこそりまゑで こく「あのそりねてある衣太が きうやききそりあす「ああまる 春おかへ影友らきたすきてせねぬ 又六ひげそそあきといろさすそれてから あかうとむ女ろ水らひの水いらせ おミコへかそそりおきたてうしろすてり かそそりそりくあてうろのんどをうつら せぐふきさ「のこ形やうめぐおまゐ おみ己ひつくりおけれぞあてさす のんどのきうち「れたちりと とうけれべおみ己あたて主ぐ 衣太へおきてあきらで正け又六 まねぐひおー「あて「あく きうらいすあへ[illegible] せね鼻文さま[illegible] み衣太をおく[illegible] さうとのてを[illegible] たききあげおみ己あ[illegible] 大りゆけり つぎ

つゞき 又六はひとりくらひに
うらみのなみだをつくづくと
うちまもりゐたりしがあんに
くれけるところをひそかに
「さてもおそろしきは
天をつくやうなるさたと
きゝ竹光を
なすべし
今又てらでの
こゝろのうちの
地しんにおそひて
こゝろのどくさつを
身にうけ
竹光がむほんの
ありこれちくしやうが
なげきのむくひ
ちへもとめて
おそきさめ
きゝ下をさぐる
ちくあくのきざみを
のんどくさつを
身させしへ
きれよとのさいの
そくざんされ
あるがら千両
さるかの世の中へ
ひらひかへて

㊁ 又六きまとと
ことへおりしが
かげへかくし
まもひそうとおもひ
すてつきたてんと
すけれど又六
まそ下うしろ
あちびやうぶの
内とひきのけ
これはおつぐの
まぶつくを
するあいり
おきてらんさま
くびはあてを
ひらきて
いけうぶとて
又六びつくり
くやへよりと

又六

百ま

㊃ これ又六の時
主男とちくしやう
おそれゆへ
あれは竹光
のちのつみを
むくつれ子
のむすめ
ありけるが
今へあん
身が
つきと
ありし
おさと
おのれ
そのど
よりも
あるさて
これ八十の
時うんがう
うけこのまま
あき上さ
とくのぶりつゝ
まぶ山をちのひら
たへ小ぶやう仁王と
名のりをあのくほか
ありとふさん身グニタ
おやをころし
これありけるを

えますくふくはくふくより
おきうしこたへまでそん又
二ツにひあかりくをとの
やり王にあかるべきを
たえはみてくれしの庄や
まめ二十両ハ村の
入ぐもあのおあつらを
あるり方あくのふ
くねけふまでふうへを
べきとうくできぬ
大きにかれども
これとはいふ筆に
のとしてきふられ
硯箱とりいでむかしの
まうなへたる名を蔵へ
小きんこぞとてきの一つう
おさよへの一ふでへいの世の
ことをうけすべしの上の
おとうてまどかの
のトのかかりもの
かくさもの二つり一寺に
風の大晦日蔵をいとの
うらにれもつひのたき木と
死をきこへ竹やぶへね
さしてあひらりたし
いざ竹アグチにかゝらせ
それうかいりてつぎ
たてんと奉りける㊀

「まうるを
おどろくの
けうとも
おもて
かきうらを
大晦日も蔵
人をやむく
うる夜ぞり
こそうたん
しひもとびふ
又ありあ身が
義心きんの
かゞまふ
下にされ
くやしみの
あくねんも
朝日の霜と
ききえさせて
甘たくを
せうりやうち
それぬくこれへ
きさまを名を
弓太をあり身が
これ竹さかかれまり
母へ古鳥とのひけるよ㊂

又六

二ツに切あつ
おやのうこき
おゐてさて又
これこれより
五子ひかしの
方へつくの
松の所にある
つぶ入れ
うる三百両
うありあり
ありのかと
くしそれを
くのわれを
ゑしまして
おさむ
ちくせ
なみの
おやもふ
あらされ
まして
ぬのいと
ゑり

（つぎ）コレサちく竹をふもあんじ身が　きついしがくうたごしつぎあげふ　つくをかへ地ごくのせめを　まぬがれて（てく）せうかくのさとに　いぞむかつりコレ母へ　身をもつてしう母へ　子ふあんあひも日　なくまつとくの　とさまれも左らず　わくてそれた中　りがくふあろう　あらねども　かくまるべ　おかつかたこ　あたまぎの　あづくさへ　まくふまの　あきくふひ　あり又六　さてこそとあり　ゆでりふべき　ことなもあうけり

▲時ふ百まつ　さいぜんより小さえ三　又とでげんとまのひみづ　さへの下さより手ひあり　つくるのくびをにて三より　たふておりけるこれへ

後小松院御落胤　一休禅師

（一）それふかくられども　おまへさん又六さんへ　一つ代でもごちそう　いつもおふ　さんとい（三）

（四）あらぞ　しいま　やくくたむけの　水もこちの人●又六

（六）あのお山びくし　くろ髪をきざし　おさふ　うれころ　あり▲此時　くどきうち　大さき「百まつ　かんがう　おいせ　をあけよ　むきて　「おりやれ」　一休禅師のことばに　ことば　とや（七）

あ息七母ある女やぢまう　子のくびとふ申しまいらず　又六とのゆうり日まつ　日の子のくびのその　せめで酒のそてたる三　時のくつの三年ふたの　すれるうひのうねさきて　しやおふくさえ三たを　見てでけんとのおふたり　言ふ冬の事ごとが　子のさんげふ書　まおされおくの　やむとのくも　うちこれで　せんとまでき　おうぞとは　あの口へ入た人　あまをあくのきて　て手を男ふる　こさ子はいさまりみこ　ぐさとつきすのどおとつれて　あるやうぞなのおちくびへ　がりくとせをうくさきこ　ふぶをのへかなれどそ　ひふなまさりてあられずる　おれがおくよりうこりいぞ　百まふとりつい「ふちま　まざまでおさこなこれ上（一）

あがれめぐりて　おそとどし　かさきど一と　まりつたれ　いるまま　りんぎこの　ありあひ　どや百生ふ　くめきいきこの　あこ「ぜちへの　あさいかたをつ　あかせずありりあ　ありむりよおや子が　きんげふつる　きこえてござらく　まゐりある　あらべこれ　や　おうさんねふろ　さまへて　主へれよ　あくらしやと　身をあろふ　袖へちしおの　かられまひ　きこえらし　おれど　おのこれひむるを（五）

（弐）おさきあんてる　おあくれべ　一休せちでれ　百まつが　ひろふ立　おひ　こよおひ　まらとあの　くるよまり　さるとき　とるの　まつのをまを　たきけんとぞ　ちまさくいで　けろどふ、そそ　おせ子うふを　げさるたてを　おかんふおりい

（つぎへ）

一休ぜんじ
又六
百両
佐々木桂之助近臣
花咲次郎吉

京山老人作 芳綱画

つゞき
[illegible]
むかふる元日の初日かげ
[illegible]

(二)
[illegible]
…吉小さん[illegible](三)

(四)
[illegible]
忠孝義貞 [illegible]
[illegible] 千代のよはひ [illegible]
めでたき春をむかへけり
めでたし〳〵

○廿二へんの大晦日猶又おもしろき新板引つゞき開板仕候

嘉永八乙卯新春新鐫目録

大晦日曙草紙 廿一編 京山作 廿二編 芳綱画

八犬傳犬の草紙 廿三編ヨリ 仙果録 豊国画 廿八編マデ 國貞画

御贔屓美少年始 十二編 同 録 十三編 國綱画

侠客傳小模略説 十二編 西馬譯 十三編 同 画

嶋巡浪間朝茶 七編 種員譯 八編 同 画

塩屋文正 古今草紙合 十二編 仙果作 十三編 國輝画

童謡妙々車 初編 種員作 二編 三編 國貞画

松浦舩水棹婦誓 四 仙果録 五 國芳画

八重撫子東物語 三 同 録 四 國貞画

花蓑笠梅雅物語 四 西馬譯 五 國輝画

旅雀我好話 初 種清綴 二 國貞画 三 種員閲

地本草紙問屋 東都南傳馬町二丁目 蔦屋吉蔵板

大晦日曙艸紙

廿二編　上冊

京山翁作

芳綱画

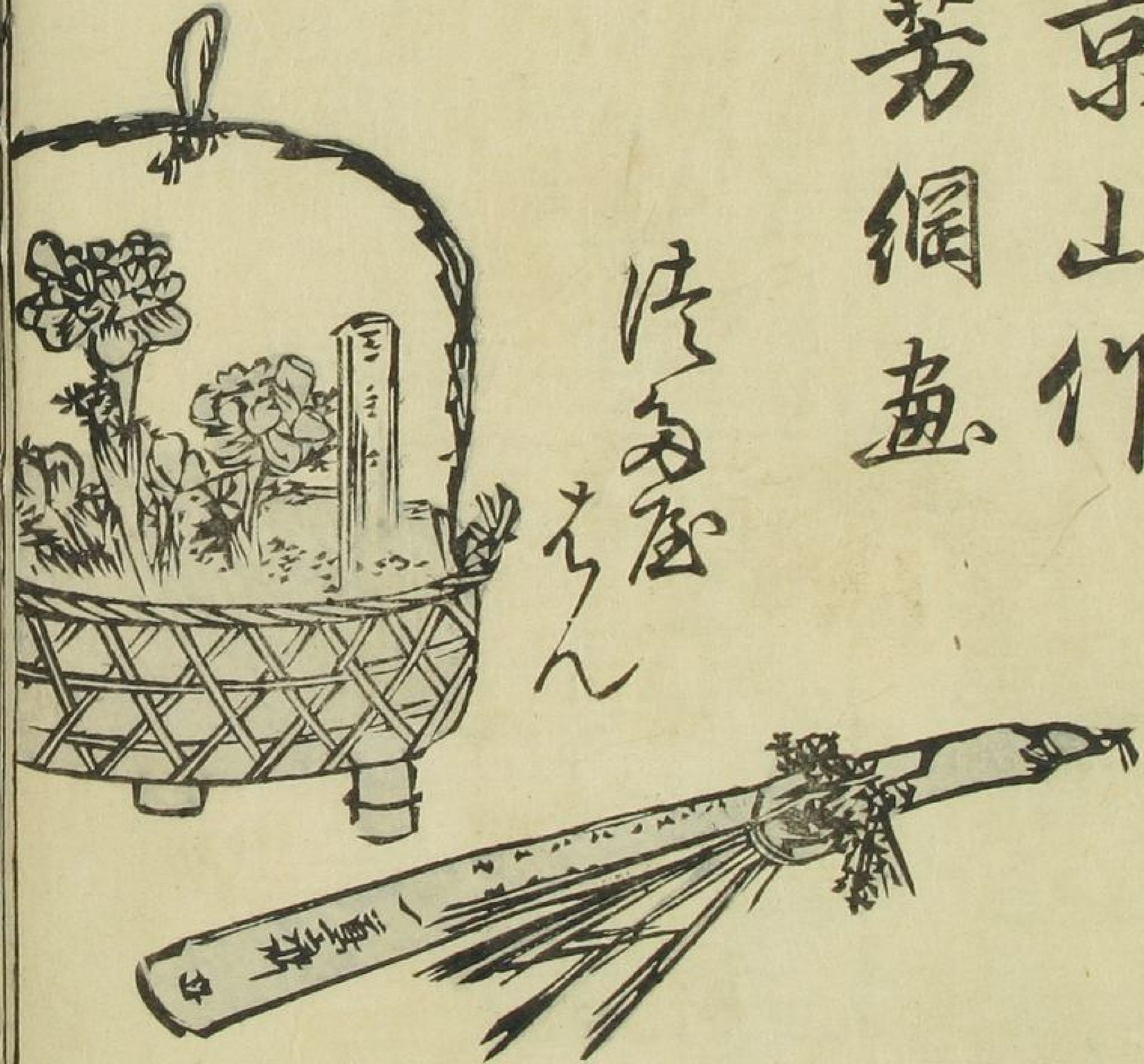
紅英堂上梓

一寳齋画

おほみそかあけぼのさうし
大晦曙双紙
七十二編上
外題 國貞画
山東庵京山作
一登斎芳綱画
七十二編下
蔦吉板

此所児曹読て教子る談　京山

今の世に在る児童の手習ひ先生ある人の児よりも八九歳に成れば師をとりて手習をせざるはなし　これらの人の子ども等あるべし　それに継ぐ人は手習ひ数を多くならひて一の心得ある



大晦日曙さうし
廿二へん下

京山作
芳綱画

清水屋板

ありがたくも上じゆんの筆ほめ出す是も目出たく、ぎるかの奥仕の筆ハ児の手習にきをさへ何ほどもなく手ならいの人ゝある書物ども紙の構所ゟ征撫八荒統御ゟ寛永の楽書と御家の流と紙をこひけるより是よりさきの流ハ大ぶん有り筆ぐせ紙屋の事の書付を申さるゝ弘法大師の書の言葉ハ書いてある物書やの書物大ぶん有りとかや又宝永の小倉紙の一枚あり

かくして又雪舟が筆の中

一

児手習の絵ハ手本の紙の一枚を御国の筆に書いて手習を好まれし

ところで すゞり 紙も

構所に依りて筆を用ひ其うちの文字をならへ数千万の手本も弘法大師さへ筆を書て古書をまつ紙の構所あるを求めるべし かゝる世の中なれバむかしの児どもハ硯箱もなく手習をする事古哥にもある事なり紙屋の筆墨も今の筆屋の硯もあり手習の師匠の手本もその国の国風あり

八十七翁　京山

安政二乙卯四月十日

おさなき手習の事よろこびてありがたく此書を見るべし

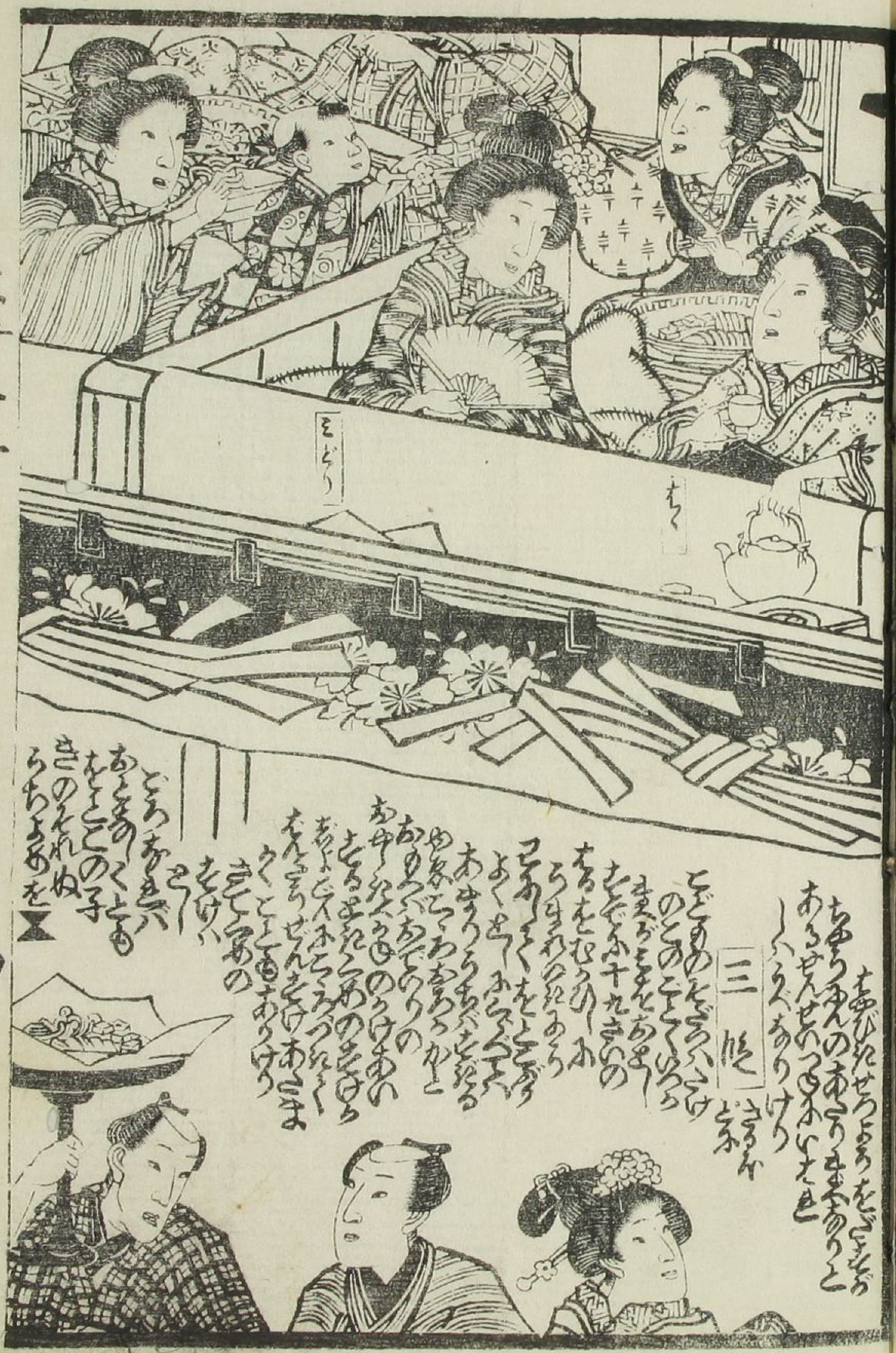
大晦日あけぼの冊子廿二編上

初段

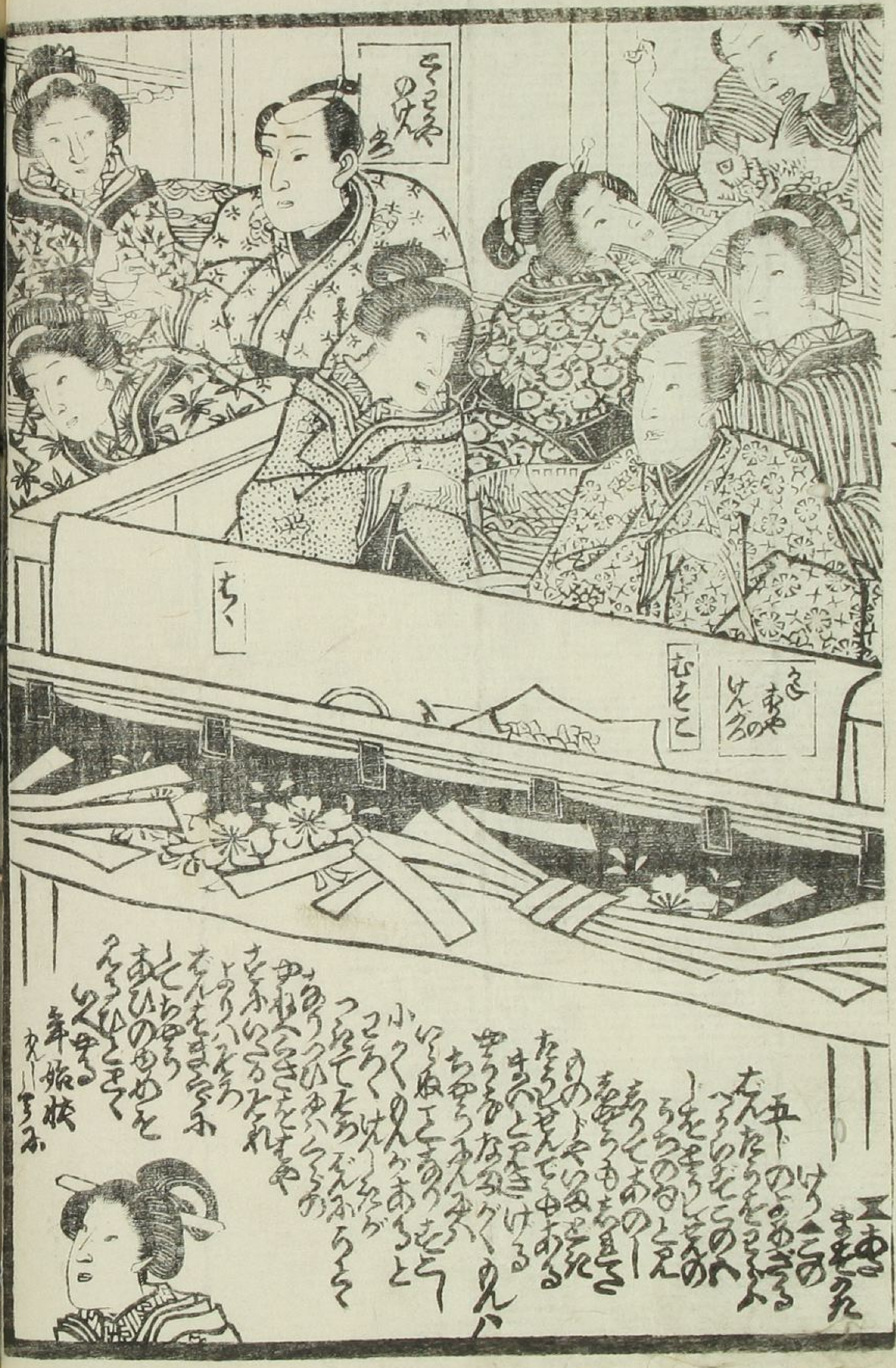
[illegible]

二段

[illegible]



ちく
三



ちく
五
年始状

其二
五段
六段
その二

〽わしもそのうへけしよでござんす・おはなさんへ
けふしもこん日すみやりしやうなくと
なんぎんそのべ「きてみやうきと
[illegible]
[illegible]

㊁くわのすけ[illegible]とちの
むすめ[illegible]
だんだん[illegible]
[illegible]
ところ「いやく[illegible]
[illegible]

七段

けふのむすめの[illegible]
[illegible]

むすめごころのうちたちひとゐ[illegible]
[illegible]
山井せんさい[illegible]
[illegible]

八段

おまへせけんそ[illegible]
[illegible]

成田山
不動明王
成田山
不動明王
うめおかや
しげの

お梅
九段
十段
七

お梅
十一段

八十七歳　京山翁作

芳網画

いのちのせ[illegible]

十二丁

[illegible]

上の巻をはり

大晦日あけぼのさうし廿二編下

かくて[illegible]

○[illegible]

[illegible]

[illegible]

くんあさう「まへ」の
そらんかつります「それなら
みな一ぶんでのこらずもちトーツ
ひろめまちがへのちからまちなち
おちよ一でもそくへんぐき
さ一まへの目のかぎ本
けら一本あひつけ一ぶんめの
まけへのおようかありり
●おんもち「おんなさまア
おいでなされませと
けいこそありかーてから　いぐさを
うききたう一き一
●うかのまけむすめふ
むらひ「あひくぬさも
ひとあがうぞろいあるまへ
このくさまさ一あさされ
あくどまぞかつりまそう
申かくそれハありうがたら
ござりまするまつうあるぶ
おうりまちしまそうと
なんぞきを一おくる
ゆかのそろけくこうめの
まそけいあきあふから
らさ一うけさせむ一了
きさう一まれむさそあ
たちのごせんべいのつくなり
こちよりうさをを
すかめて紙をもちふ
ござりありかが

(二)ひとりさみしききやかうち
つらくわかよふあめの
よそふにこるむすめ
まくらふあるまし
してかひようのきこの
つるとおまして
このかぎのうさを(三)

まあやむすめとうめのすけ

(四)つまなう
べし
それ子まさくと
むかしひろ
ござりぐにおあひ
めぐりーけり
うくてそのあろる日表
それぢをそのかつき
そのむさかがたちよりゆう
たのござせんべいの
そもふいる
たまご
せん
べの(五)

(六)あつかなきたかうめてとはなうさたちそさよみのすとむさみ

ますうさらくてう
らくとを
うりてえうり
まするとか
このみどもふ
との
ふよう
たち
らうつに
あるもも
まりぐふ
あいをを
ぐふ
うめの
をけい
あしかく
して
たち
さり
けれ

十三段

さうれどまふ
うめの
まけのぞえ
えつうし
よるのあめ(一)

(七)あなきさのふをあし

あまえ

(八)「ござれでおくくこれ
みのんめのおりくござら
ますらおやおくふ
ひきつひれのふきれける
なうそおさくもとより
まいまふなれのありけり
およろむちうたさで
せんべいのをりそとし
らくちからわたくし
とちらへおあがり
あさきまませおうとこもさん
おうけなさえかまのさん
おちゃをおけておくまい
「おいくとのまえ
あけておちゃをえらぶ
とうらめのまけおくを
こーのそけがふむすめ
さんまんてんでわる
あーとおが一ーさんへ

〽ふよらむすめらうしをどり
らつさういやうけまべ
ざんをもちいられのうを
いまの申すてしゐ様のを
おもておどろきのおもの
むすめとんとさもこの
やの御らうむすめおえ
あの申らたくおどぜん
べいあとこうござくしのふ
らひとしおあいのをあを
ろそれとすねりまり
「おとなしきのふのおあの
子どもんど申おあかさをを
あろしおえつまし
このく「いやくおあま
申ありふかさもあく
きのつく申ゑあかく
ろりくさうまうしろく
「さあらでござりましてゞ
ふらりてあおきこのあま
さけられぐもおりぐる
ぐりてをりましおあの
子おりのやしまうらして
はそこぐりらこうので
てどとおさうの申せぐらし
これ「ごけらし
これをでごんふせんべいの
ぞおうをおねぐひまうし
はやす・めのそけ
「おりやおまへるの

〽まあさそのあさるのう
「そのさあおそぶきり
ますさきのふのむすめ
やもつそうがでし
そまさとまう申されも
まさうさいふめうみん
めの申ゑさろくし
ひつめぐあつめをまんぶ
しておのどうてうを
かいはさうおとこさく
とおりさすよゑぞ
らめのまゑけびんゆも
あゝひきまうしまうしも
おんきうなさてて
おそのひけまゞよう
いあくろめくろてふ
の〽をつけたるを
おおさまのおせ「これ
こんめちおあらうあの
おさしそうりけへゆう
おぞくうあさこうまを
お

とさいふ〽けまべ
あとおひふとくおし
㊀

㊁いさえ「これハまア
おうひよふねとと
「いやくれお
つえてふをりゆつく
おこの申しえろう
あり・おつおえ
さてとえと
あのひ「さあらで
どざりますか
とてふそし
ちろうまア
まあとれ
つとめく
のお
でえん
さりし
ろう
の
㊂

㊃けのとうあやす
まあしさくえしけり

㊅二さんやえ
されのおろり
ゆへ
あつらく
うろさけ
さまハ
らめの
そけが
わもの
そばあ
たいの
えん
およの
ふち
おハ
あふ
どれ
ざも
ふろう
ちよくを
らせて
のち
ちの
らえを
あう
おうめ
をき
ことひ

ころとゝをかのめ
のいろう
それどおいと
つまるまを
ひかざのなをも
むとのとと
おえんのとき
ぎりと
おあめひ
〽ふしの
とまるらう
ひのめよまあ
こおまうらも
べしおあの
子もまさ
あおくまあら
さぞうれし
ぐりまする
まへのおひ
かひとろあがう
まをときらさを
まうしく
おてあし
ありくめのまけ
おかまくさむ
めてとくれぐも
このけまえおきた
十だんさうえ
よくのわかる

五とんやもちまとき女まゐり [illegible]

あの子がおまへさまのもとさぞ [illegible]

十五段 [illegible] 用太 [illegible] 石町の [illegible]

[illegible] 四 [illegible]

[illegible] 百五十 [illegible] 二升 [illegible]

㊂ [illegible]

㊃ [illegible]

とんやもちまとき [illegible]

[illegible] ㊀

⌧くるかゐまする
らいさまなど
きられし
ようるが「父」
やゐさろう
でござろう
まするぬらいふ
しくもあめで
こゝでござろう
まする二つちそ
そのうけ
「うめうでござり
ましよ」ト
ありやのひとり
むすこうめの
すけおうめを
ねこのひめんの
うちへおくえを
つらりあやをも
ひ红とりらく
わんきよきせんとふかく
むすめ一けまだ[illegible]やの
[illegible]ひゞなゐきこえ[illegible]の
やんまよく[illegible]をひ红
おは[illegible]へんくらいてうゆんの
ゆきよう[illegible]あかくらよろく
きけつ[illegible]ちくりーのよう
とう太いら[illegible]のすいまろ
ぜめのたいも[illegible]よう[illegible]
[illegible]かくちだんのり
いあぞいやりのちえんらひを
まうるひとより
あうちいをあら
そのまゝであつそれ
ぐいたらうれんとあ
あぶろ丁きんのてら
けれせんとふゆつさき
あそぐくいふのいみろくきあひ
やさぬえゆくくでゆう
れよさく[illegible]けかりいーのと
らぶーをふゆかりあなさろ
いもくつうまうんくえつる
[illegible]あかまきのそ
づりーてくりけり

十六段　さてある日
うめのすけハ
うらてもあらぶむ手代
玉ふやくのひさらんと
ころられーしやく
そく[illegible]まさくハを
あもれ[illegible]
きこえつてあとおかく
やらをそをらず四けさ
あまおハ[illegible]ひをくひえ
あらひ[illegible]あかりあ
いのひくにけきよせんくるあく
あり[illegible]のまくあそくうけまで
くめのそけはなくのやあひ
あるかつきれーあめひちつきを
あくーて[illegible]りけり一

二これ[illegible]くめの
[illegible]のよう
[illegible]のと
[illegible]
[illegible]

[illegible]

② [illegible] 白牡丹百廿四せん [illegible]

③ [illegible]

④ [illegible]

⑤ [illegible]

⑥ [illegible] 六十四せん [illegible] 三十二せん 京山 自画上ゑさん [illegible]

十七席 くてゐあのさけ日本すう家ひつのりけるがあさ
ひとりむすこあれてふくさあ家の
あれトかれこうくさすくろ日本あゝ
一ころよのりやたす日きけきどもも
ありぬり日やのさくやふまうせせん
まうされどもふちきん上人の
おそりをあふくあのさけちえ
のまさるうちのおさよのとけるぎ
けむよのりいろあのさけるご
うつかりのうのきさちをきある
つれてかりのうちさんけれあ
たいところさちゆちくんどを

おはやかりしてゐるこれのとゝおまきうさり
かちよう太ざゑもんそらうらしてとくめのさけがちつ
らをおくうしくえりとちのひつりぞこのおはけれうしろぐ
さて

十八段

十九段

十九段

安政三年丙辰歳陽春開板標目

大晦日曙草紙 廿二編 廿三編 京山作 芳綱画

八犬傳犬の草紙 卅六編 卅七編 卅八編 仙果録 國貞画

俠客傳仮模略説 十二編 十三編 西馬譯 國綱画

松浦舩水棹婦言 五編 大尾 仙果録 國久画

花菖蒲梅雅物語 同 同 西馬譯 國清画

壇屋文正古今草紙合 十一編 十二編 仙果作 國貞画

新當織帯屋縫合 初 二 三 西馬録 國貞画

八重撫子田糸物語 四 五 仙果録 國貞画

義經以佐雄軍記 全 春馬譯 國久画

八幡太郎智勇譚 全 同譯 同画

名高手毬諷實録 初 二 三 種清録 國貞画

地本草紙問屋 江戸南傳馬町一丁目 蔦屋吉蔵板

安政二卯 八十七枲 京山作 芳綱画

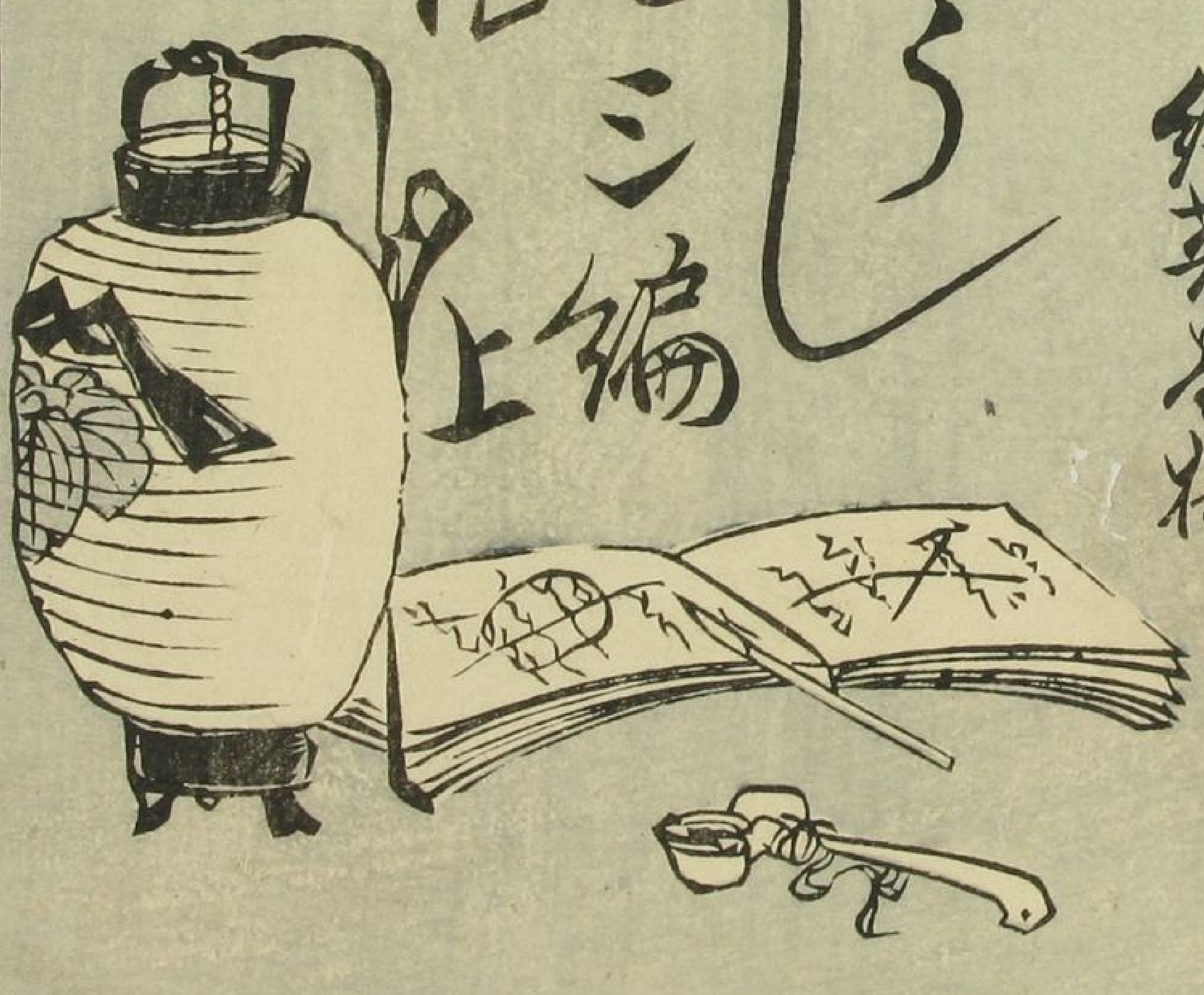
大晦日曙さうし

廿三編 上

山東京山作

國清画

紅英堂梓



一兼画

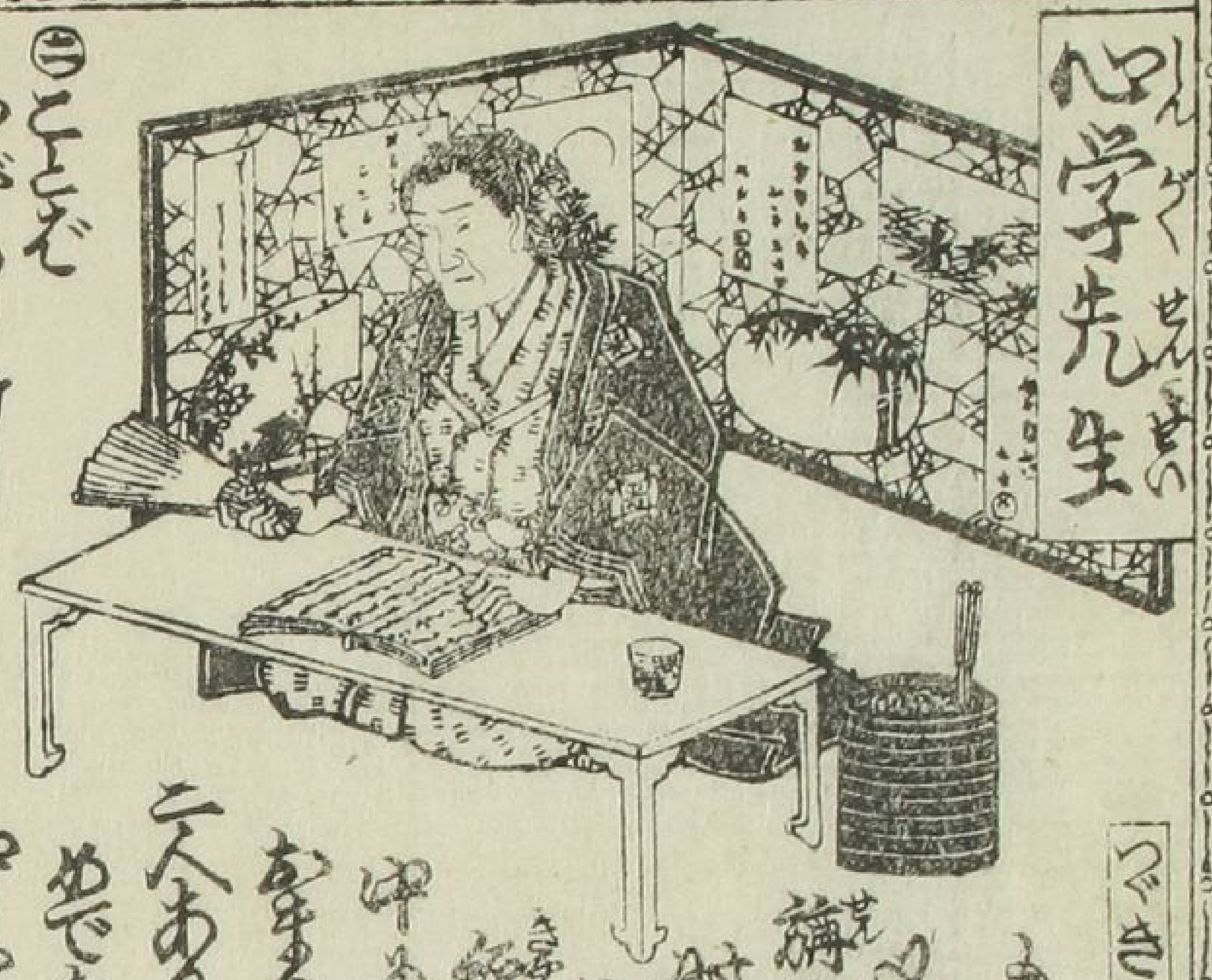
大晦日曙草紙
廿三編上
蔦吉板
川國貞画
廿三編下
外題 國貞

大晦日
あけぼの
さうし
廿三編
山東京山作
下絵了稿
歌川玉清画

大晦日曙草子廿三編序

儒学の先生会日の講釈すみて
おの〳〵かへりさる中に六十あまりの
老人ご家の町人ひとりあとにのこりて
せんせいにむかひいふやう三つハせがれが五人
ありむすめが二人ありまごやしやごまでにたくさんぞ
手代が十人あり中に用にたつハ
二人のみなり人も此ごろハ少しづゝをきかせ
ましてくれますとてハ人ぎま
しくありま
せうかや
こまりみる
先生せんせいの云て
それハおまへの子ほか老人ハ
つかめでたい人じや老人ハめん
がわせうせいハうちへ名をとつ[illegible]ぞつまる 一

二 めでたい人じや やけを
学者でも
されもく
釈迦
やみ
ならん
ほか
三百人の外
でし あり
中かまたらへて
お百人これを五百 次へ



㊁ことぞ
むべなりけり
されバ此大晦日の
せつぶんにハおやのてま
ねひて不孝なる
むすこをさとすべきなり

つゞき　羅漢といふハ仏のみちをよく学んで身も
もよくおさまりて五百らかんの中にも
文字にみだれて十六らかんハさて釈迦如来の
旃檀樹の菌に金傷して今だ涅槃をまつ
時あしものおそろしふのさまハよくときまもるのちに
仏法を御弟子にさげとのさまりしが小乗の
経文の中にとくさまハ五百人のおでしの
中に大寺らの此おむかあひハ御弟子一人とまもるに
弟子ハおふなみのなかに十人の年代に二人の人のむすこに
二人あるハおもやくさりまゆもまさりたるまでおこなひ
めでたき人と申すハ孔子さまにさへ三千人のおでしの
中にてよいおでしといふハ十人を十哲といひて顔回閔子騫の
七十子の義士が十七人小豆坂の七本槍などを
さまりハ七本槍あると老人の人たるハ
すくなきのでハござらぬか賢人といふハ
ちつと此のよにするに漢朝にも人の▲

このむすこをさとして不孝なる
○ある人のむすこ
親をおもひ
たのしみ
たてまつらす
かくしとれ
まよひて
かたきを
とま
八十八翁

▲むかしありし一人もがくおれくぞ
とくあげきたる侍は文庫子
ありありおおきな人もなき人の
むすこがなりてかたいぢに
二人あるハたちうとくも
みなもまさりてしたる者の
世上をみるにそのむすこ
八十人をせよとひ
とりもあくなしいつかう
中においりと二人にあら
おしうまつりそれよとて
孝経といふ書物を
子息にのこしておきるも
不孝が身よりとめ
まいめと心学せんせいの㊀

むかしのむすこ
子をのまし
むすこハ
まてがま
けまど
八十八翁の
京山が
あらわす

安政二年
厚孟春
稿本成
晩秋上
梓登板

大晦日あけがの宮じ廿三ん

初段　今へむかしのうけとうや　かまんらのそれぞれのさきをまがる　みるまでかりのよこ町あの松に　ごろすかもぞを　まて入らるこ　そのの当あがりし　二人のたんどうらるで　ほどそ茶花のむも　ありてござらふてきも　きむきららか　そしどを　かけてあける　もおりおがるも　おり茶をのむをとこ　「ヤアおまちうらり　みさきのは　おこの一みけかれとやものらぞり　水木らの鉢が手りおどうどいらじ　たらち大入やきらふらり弁　うさ　廿日のとりらか芝居でもありま　ぜねおるまらのききくをさいちひか　むとおふせがまし　よんぼとろまく　といひつくきるもの也ぶるへお

（三）小ひき　よりつくゆべ　ちくぼ象「おせのくよ　ふところきうら用　ちやんところえふて

（四）とりかわれ　ものかて

そのかん上二番素　これおんや　名さえおそろし　年まで多りん通日より　おぞりけんがふ　まいりまま　りりけ

ことも二人れをおりるふすれちぶひ　あがりてきくアリしへ　きよまやそくおりんせんとくべく　とてせりとあくくの　むさと二へ　廿二三女のおり　むく男ぶり　それとる　より二人のだん　おう「のりつうち　だんきのらの　うらかのおおら　又おぶみなのり　まくはるうる用　面素を手くようちひび　やたまどおのでぶ　きた両象と二んひ　つんえの（一）

十組十五二月
おんじみやうくさ

（五）

（六）大かくこれひらのよし　おかでやうのよし　ぬしさまも　わんいそおされ　うまつくて　よおきやりが　いやで　おのかわ　年まがかれ　とって　かんうるぐひなん　むろう　ふさきれ　べくれト　よまでおる　まとろくすく　べ象がまる　そのでの一也　さわりし　也あかなりそ　やうどおく

（二）たて　のあの　そうかわ　つやせの　大入年　入日も　られく　たいこの　あどうり　ぶまくと　あおまのく　きどきのきまく　八茶やくい　あがる二人の

その二段　えうさ　ありう　弁

つぎへ

つゞき
のゝこよ市
娘お梅

（つぎ）くるまのんちうちそうひ

三

一ヤレ／＼小きものゝこと

四

その二

五

[つぎき]よ市も
小だんのお一ね
あるところて
あめひとかけ
あひませう
言されべ[illegible]
あらでよくべ[illegible]
[illegible]
あ[illegible]
[illegible]
[illegible]
ちびひあ[illegible] ㊀

㊁ あんお[illegible]うして
よろりやの
たまえのことも
[illegible]
[illegible]でござり升
[illegible]
こうくしのから
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
まし さ

[旧 姫]それ[illegible]
さて[illegible]
ご[illegible]
[illegible]
[illegible]の
[illegible]
きてられ[illegible]
[illegible]の茶や[illegible]
[illegible]
[illegible]
ひ[illegible]のうちの

㊃ [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
あの[illegible]
[illegible]この
のちあの
ひ[illegible]
[illegible]
ますうら
[illegible]
[illegible]
[illegible]
らぐ さんせ
「すゑや
きれ

さ[illegible]これや
[illegible]
[illegible]の
[illegible]の
[illegible]
[illegible]されへよ
[illegible]をを
[illegible]
[illegible]
あの[illegible]をひき
[illegible]をひろを
あ[illegible]くて
[illegible]も
[illegible]のうぎ
あ[illegible]へ
[illegible]
所人がらしろ
[illegible]
[illegible]のあや
[illegible]
せつ[illegible]
[illegible]
[illegible]人
[illegible] ㊂

[illegible]
ところ
[illegible]
[illegible]さ
[illegible]とて
茶[illegible]の
[illegible]を
[illegible]つて
めの[illegible]ひ
[illegible]
[illegible]を
[illegible]を
ひけべ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]すり
りやあれも
あ[illegible]
[illegible]や
一[illegible]も
[illegible]
[illegible]
[illegible][つぎへ]

のびのびに

つゞき「わがみやげうりの事の
○女房「いゝえそうかへ。おの
うちのつくらへおかへり
[illegible]これとむかう
○「清みや[illegible]
らんでござい
ますかい
七段
とてよまくさ
ちくへ[illegible]
[illegible]
ひきのぞいて
のちまた六日
[illegible]
りゝやあらしの
[illegible]
さうかまゝ[illegible]
やうめの[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

まあうがのことを[illegible]
「ま[illegible]あり[illegible]
[illegible]
[illegible]
こゝへ[illegible]
人目をあのひと
ひふた[illegible]
[illegible]
[illegible]
二百[illegible]
[illegible]
かの[illegible]
こまくに[illegible]
べつの[illegible]
ゆや[illegible]
されい[illegible]
[illegible]
けさ[illegible]百年
[illegible]
[illegible]
ぼ[illegible]
[illegible]
そこら[illegible]
[illegible]

○まくらあるそれ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
まへさまへ
より
平両の
[illegible]
[illegible]
べくは
[illegible]
つゝもりの[illegible]
のこゝ[illegible]
[illegible]
二十両八[illegible]
やべくは[illegible]
[illegible]
[illegible]二十両
二三日の内に
[illegible]
されべく[illegible]
[illegible]
三百両

つゝそこら
わら[illegible]
[illegible]
ゆり[illegible]
つけの[illegible]
そのひや
まだ[illegible]
このまゝで
お百
りゝ
[illegible]
や
ま[illegible]

つぎに つくゑをさしおかれるとき
あとへやうてんのごあくあねぐ人
おまへ様くるへこゝうへしでも
まへりかねや
のとゆうしく ト
ありさくべゑあとのふ
こゝをさんて大ふ
あどろきしがそり
どういふことかのめく
小まへおのるんせと
ひそうのくされあり
むまそこあり二三日の
うちは千両の
金ごうのあてもあ
なくあちこちふ
ありくすんいあり
大まとられしう
まつりけがでされば
このよであればとのふ
ふところへべゑがそれ
そうひろうえりしを
あくまつけてしが
さりあいがらのほとする
しろふあらぎりしれ

㊅まづ ぐざ ごれと つれぎ けり
〔九丁〕やの ゑんまち さびろうへ きそうの 三人をかく うりやの二ろく つまあたくる

十九のまかうもられおちや
きびのうけらもあびんと
あのかをれ神へさけあるを
たまへあるあさへし
〔八丁〕ゆくやぎく者めんが
せうまてくべゑもうへし 大
あくまのもひとつもあぬを
あもあもらびへかまんせん
あくまのてんまあまふ
えもまへもまきとの
あをちびさかり
しぶあんぞ
のそ
まうききよ
ぬいの
そるより
身もちおちり
あきき
お家のそんそう
がゑ八身のもち
あくがありとそ
せ子をのぞて八月が
たぶあそひがくてるぞ㊀

㊁つきうしこ丸まう
おもい八ありえて
いたえずけれ虫てより
中ききありかさ
つもあそびてえる
日くれもぎきあひ
主人目すへのみ帝㊂

㊃うどぼの
あい丸いきて茶やの
わかあまありふ八を
まりまたうのきてそく
すい八べてうへ三わまう
さいわむふまぎんまえ㊄

〔口上〕あへびあふ吉例の
京さい縁座二丁目
末でんえせ・まく
しよぎうん読書丸
一包一匁五分・廿一
きこんの薬めの
定をよくもつ目の
ちからをつよくし
けんきをさつての
きうくゑをひらく
二りうのとて
そくごあから
あり女そうこと
お丈りをとこ大
あんや合いゝん丹
八才十の上たり子も
あなせのぜうふ
まさる女八五十
いよたりまも
月けくるうらい
たらむつるつう
合ありねかでく
一才五十りんめつくり

八十八歳 京山翁作

國清画

つぎき 半 おこかみ下
・十三味茶市とひこ
きおまきちあ氷見粉
一銭百二千二百せん弁当いろをを
あくしあんくれのかやを
いぜーいろかどのあ道
しやうみても一あきつくべ
あんえぞ三のぞ
・あけど・あしもあけ
・きりきうつ
ちどあおぬあう
・あんうきり
あーろいろ白が
えん百廿四せん
そうあのけそひお
ぬあう・大様上
あ海ひのたーろいろ
雲のうえ六十四せん
・あくぬきそうちり
はいあせ屋あん十あせん ㊀

㊁ あせおきばぞ
ちんえりへうくを
・別荘あわろ
松様尼十八せん
あちおあ銭ぐひ上仰
左あんくうくぞ
十起 からさふ八三人を
からあかのころく
つまあさ二あまへうく
よいきこでるあひ
ま・三白あうの
あ市二あく六よの
もころへもあるまむ
月あどりのあむ
三分いく家もやく
そくがまもらひ
・ひきて茶屋のか
ことまふ市さん
とうつ中も
せてなくはべ 三の巻へつゞく

大晦日あけぞめのぞうしかとへん

とまかうべ八さんハ花やの
おけ代三あまと分まへ目の
さのそくさご一ぶうけ
ありーもあせんく著く
小そでとやとおびを
あち入一七一あのうち
合・かごやのおしうち
これがろ八さんで六八
さんがろ八のうそ
つきあらもうでも
ぜっすだれぬけぞ
あのわのよあやきの
よもつありて
十二ぶ八百五十の
ぎあつくおまて一六
せんけうまそうその
うえかむぞやをよそ人
のりろてあまぢうらを
あでよんさてもたく
でへかせさまの上三人が
あひあの世の手から
とせへかうまふもかも ㊀

㊂ つれがだんなへ
ぢちまけて
ねざいのそくうて
おくるやあのーも
あきあわせきア
ぞうする
のど・ぶろ八
ろ手もご
ろ手もご
とぎこそぢめ
かうりのーも
そうもたまらが
だんあ大あれと八
がんでろくいやまぶ
ぼれバそうち一が
せんだくやのそつひと
うけあんへその目ぶくーの
あきためのうりさろきあ
かうつてもちれでるが
かねへで何それよりへ
こあ三であるこれを
ぶつけてくぐされ
あと六のとこぶきだ人
とそう手まであそや ㊁

㊃ つらうき目のべぶや
まちがひのむいと人
うやをとあいせて つゞく

「つぎに」いつぎまいと
まうでくへのがあの
あつしよとこちで
まちぐ〳〵ざんどう
でもあ母やくぞや
がろ八「こんどハ
きうどんがいあれ
御まあれりかこまれ
のとたやりとがん
まべのつもりきの
もあのおし八
ちらくへいかぎいら
あり上でちやかんで
さけもあれど
まう〳〵がろう

八ちきつけれバ
「いやまうのゆね
あの上六とゑへ〳〵
上戸あかりくと
いひけいきいバもら
たちう上戸のあ
八「これがろ八
がのあまでうさーる
ちやんあつのり

とれあんごしやあら
やとりへこくのそう
ひれあれがうするつのりて
よけ上へあまでがうも
るのきれがさーつハ
うけあんぞ・あきき
上戸のひきこまの
かくゆのきうふ
おし八さんさけを
ろてあらをききら
まる上このことを
がろ八さんのごち
さうのさけをのむ
あがうのきごもく
あやけんあ人とや
かあのはざうゆとめまく
あやくへそうどのひ上戸の
目あつーのゑ部
「くそ〳〵とつあ
あつかりくく
えんであくのざらくく
とのアズ八とのくことをを
たくげバそーどの家くで
つまりめの「それあいい（一）

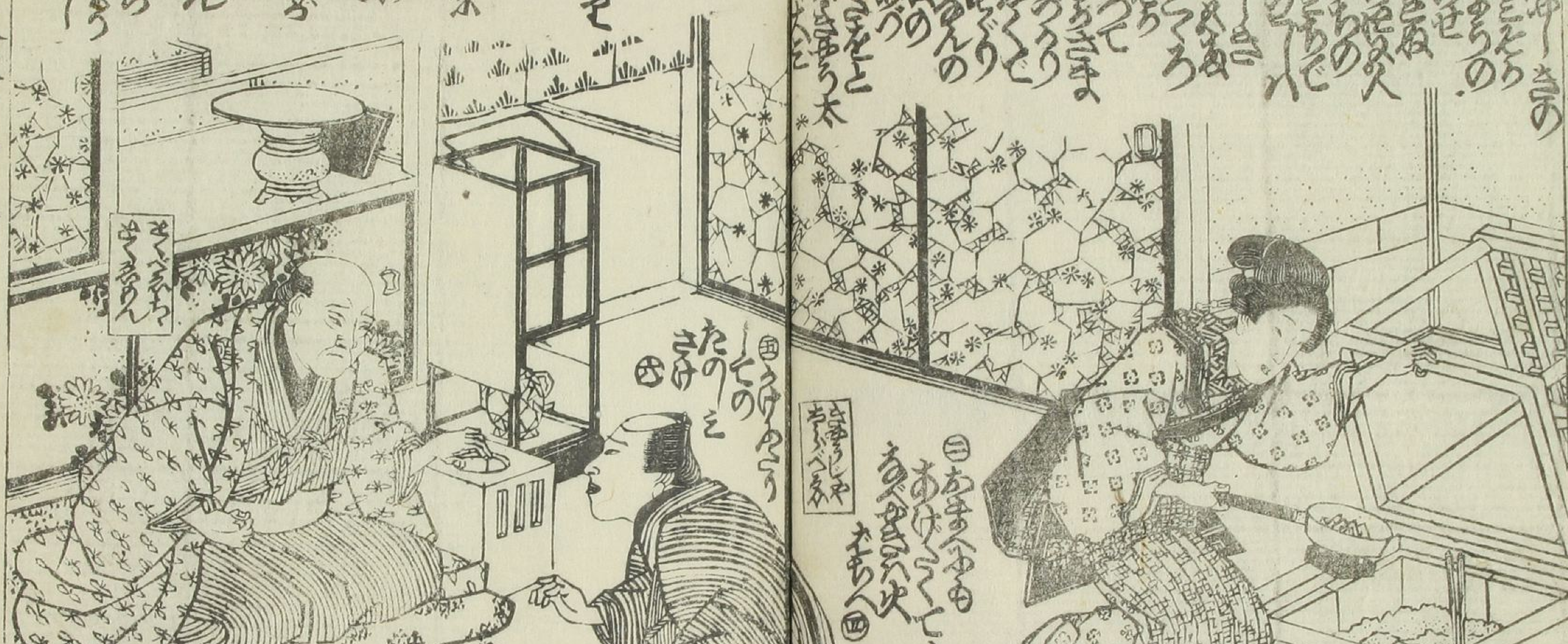
（三）こくへ
きまあら
じや大くら
べゑとて
こくかーと
とのろま
ちららて

（四）でのう
きもありちらちハ
で一ぐ三八女房もむとをきるむす
めあり生くべ石ぐあやききあのんと八（五）

（六）ひきーう
せのすけきい
あそ上
すむ

つぎへ

つゞき けいかなゆしきの
あそびひ大三そろ
ちゃでんりようちの
あれのねこのせ
つへきのあき夜
なをまやりがれ人
のりとみよちの
ののれちのこちで
ねであうしゆし入
まのゆあち中しき
がよひ太夫千ぬあ
ゆどくあくてつてろ
づらひ太とそち
はでおづろって
らくさ三一のおさま
め手もあつうり
まぜうとあくでて
つうかけはゞくり
ぎりだし五んの
中でもやれの
こと一やあづ
やりのすゞまでと
四ひけまでべきちう太
大己



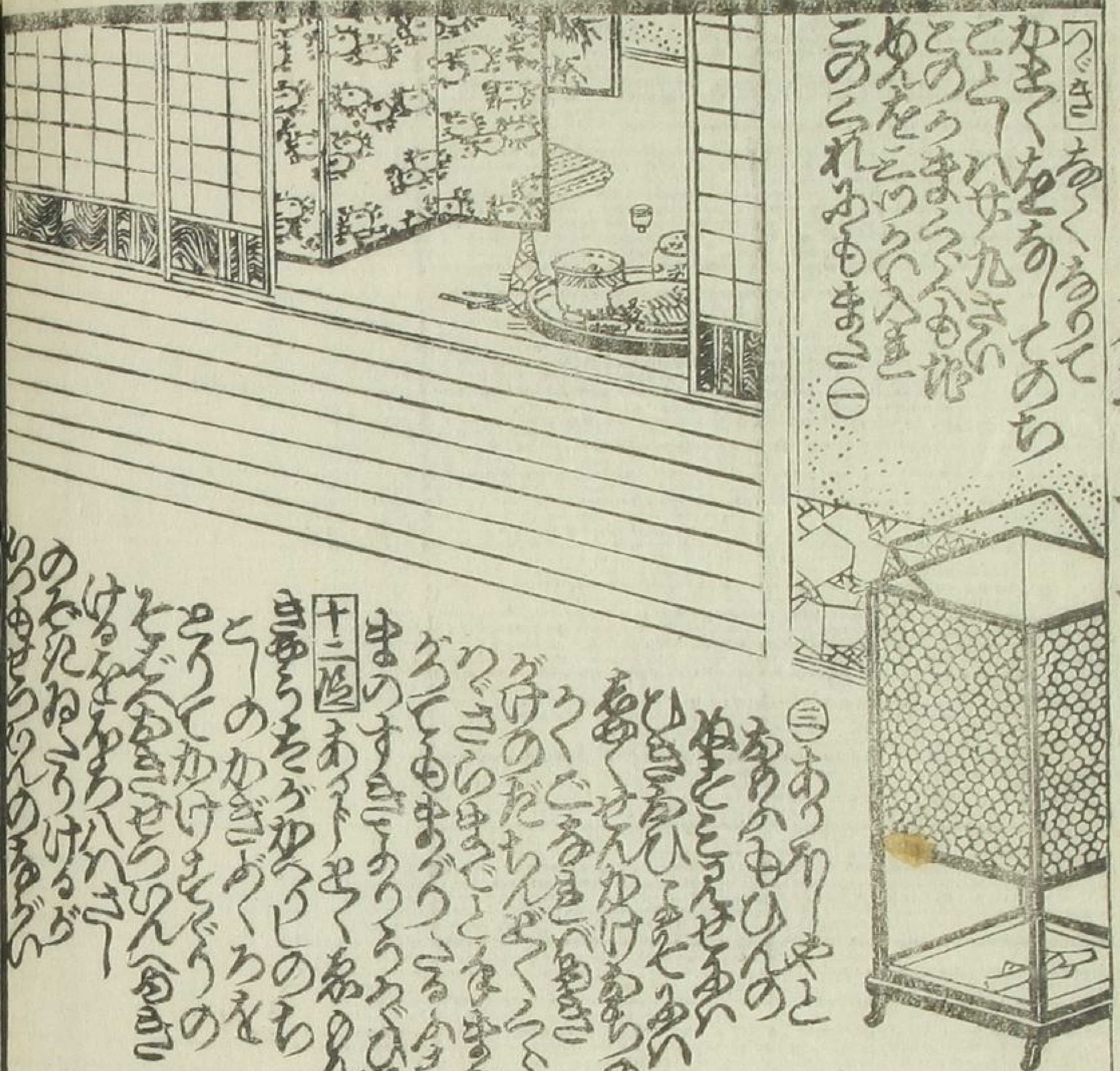
七 まくべゑおまへも
いそのあすうへ
ちくべゑん
けさうひは
まゞうへぶ也や
あどまうきうり
ますいけんいへ
でもなうへるさ
そとへひとさへ
あのぼしたら
やうらまれ
うるさくべゑが
あ木のざく
ちくへ十あの
まあげうしが
つまも字するゞの
だんなの
やゞねうちあひ
あわらうまでよ
むす
ゆれ
ゆあ
かめ
か

みぞうまでれ
ゆめ入日よ
ぐさゆへ
あよびま
せおとうふ
どこ太ちの
こうやまちて
茶やよう
さけさうる
のちきろう
けしへあつる
ゆへるあき
民をしちら
おちらべせぬ
よ大ゆぢう太
一のやくこうが
りあわくて
さこのしや
やちぐ見
えけさう
でくよあちこち
あるきあんまう
きむきあつて
ものうへ 一

さくべゑ ちくべゑ
うけやとう その たのし さけ

食文用

うくさせうとあたてのあよまうやあしたのそうをものるされなる大あやもでんちもあさうへ本ここもあってさうくやせかれて若さつぜのこうれかうましさとうぶ十九のあんざん
つゞく



（つゞき）さてさうしてのち かまくらはおとうしのち とうしやう九さい このうちまらへ入る あとをとりへ入き このうちみもまち（一）

（三）あり／＼やさと あのかもひんの やとこうせうの ひとあひよせうの あくせんかけあるちの うくどうさべあき かけのたちんがくうう わきらほでとてまへ くてもまがうるかと まのすきてあうあくびはら

十二匹 あく／＼して あのえん きあうそうかゝりしのち とのかぎおくろを そうてかけそべりの そぞろきせうひん〈合き〉 けるぞおちへはさし のそれねそうけるが

（七）かぎのふところ かぎをあわせひきさ ぶしあけてきざり いでこいに十あの かえんのところへ ねがとみ十ねあの もごろの小つがをつち とうまた二年めて 小ざうらうだんまう さえくあゆしきの あつのひあいをぎこで ござりますまそん まあくとよびたてふと かをいくとうんざ 小つかぶうぶおると まどろくあふう さいせんのころのふ のとりたる一神ぞこう 小つかをえらちよう さらくとえまでかさ つふあくよりいでて

大晦日廿三（㐂）あつと そあのんそうりんより きうくいだあかさとの

（二）ひかる あかかま らへくだる とてせんぱつ をよ怖をまて まくらやさてまくべき とうつるとぽんびづぶあがら ぞく太ぐ入もめんがくそれ ふでござるとおきんとうち とをまうせてるとすす さそがのきあら太もあの さうのあうくるくよい けんかあいづちをようち さうつきあさあてくうけり 金ぞんそうのかまう八へ さいぜんとせへくうだん あうそうこう のそけい八十 入あまあつうし かねうけそべりの ひきぐ入へ〈まい〉かぎへ だんなのこうしれ（二）

だんなこれぞさのそひ とうのかぎがろあいて やきまるのてんのあとへと あつう（四）

（五）なまへ 入あまう うあづきまがう さうようて（六）

うかれかのきさうきごさ ころゝへ あきを のぞ まうぐ まう あき かけ きそ うりも かぎ のろも ぐそ その まく あて つひ ねう しへ 宗 せんめ さうあり まくぶ（つぎ）

つゞき 六十二才の
やしほの母ふぢゑ
十三ほ さてまた
やく平のんでぞがれ
やくべゑハあそびが
みらけぜいたくをきハめ
せのかぎをみておのれ
どうあれてんぐのやまびて
ならぬどうでもおやぶのぞ
けさうのやとうらうけの
おやうけ三十あとらしとうけ
めぐらしてされうくせんとあかなふ
きよねんのそるうの身もち
あしきむきこぞまし大ねぞ大
目のやの金二歩もかせ
ひとおくらうべへんせのぞん
さうざかふら八ふらちあうさき
くわんの恵ちもあらんうと
恵ぢどんのかねを盗もむなどの
あく人をあてふするもいろふ
うふろのきのよきむさに
さむし一もいのきけるどかれ
いやせふきのてぢぢえかくりし
ろうなら中ずなへとぞあやだら

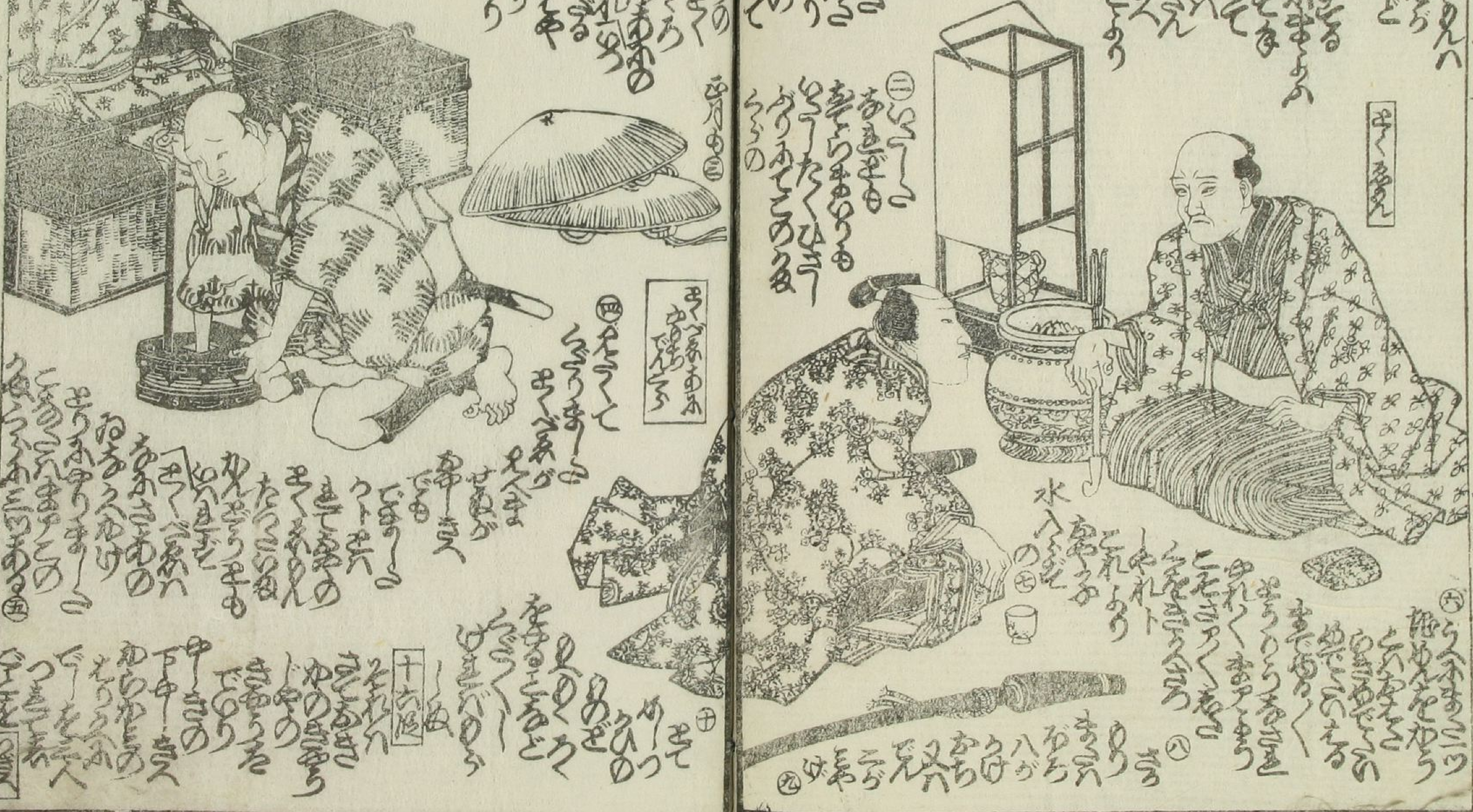
こさうのうくねかくすをまきへ
一杯ぞらりひやでも一ツと大ぶのそんふ
つけバさけわまじりてこうまろ
小つぶうやたらじやさぞめの
らうきとりやのしきあうくさる
いのりくるどうもくならんと
やくきうてのみをかあけ
あけてへのきあつめて
三ねバ一とおぎりまね
やひふあし　うるさふたこ
ろえあし入れてころへ
そらにそいのひやざけ
おしのきも恵どろめど
ろふやきたてうんせへ
めうんとつまづくかけ ㊀

十四ほ おや〳〵ろやのん
あたおぐり「やイ
やくべゑふとてもらくら
ぐゑふうちとまる
うをひきとむる ㊂

いやゑくりしさと
うしこのひき
ぢうしおあやら
あいやう「ゑく
いふあくてんまの
見られこてんきや
きのてある正月
おそらなハきらから
あまひのかねふつあり
ぬさんごふちひあい
だぜくとおひあがら
みとこあんをいれて
ぎりいぢうしをねぐひ
ふうむらくとぞ
るやこうぶのかねやくゑのん
あまぐーごとぞ一もそのうり
だぶのきらくぐーしもたびく
いつふいびてもむうかくぎ
けハかんだうせうの
あすへおひざそうあト
あめひふれどこ見
あとふあくありしあのれが
ちいをへの手見あふの
やくゑハ大きなをこしの
つぎへ

四
つゞき かくして
ちくべゑ
ちくへゑ
ちくべゑ
おやぢさま

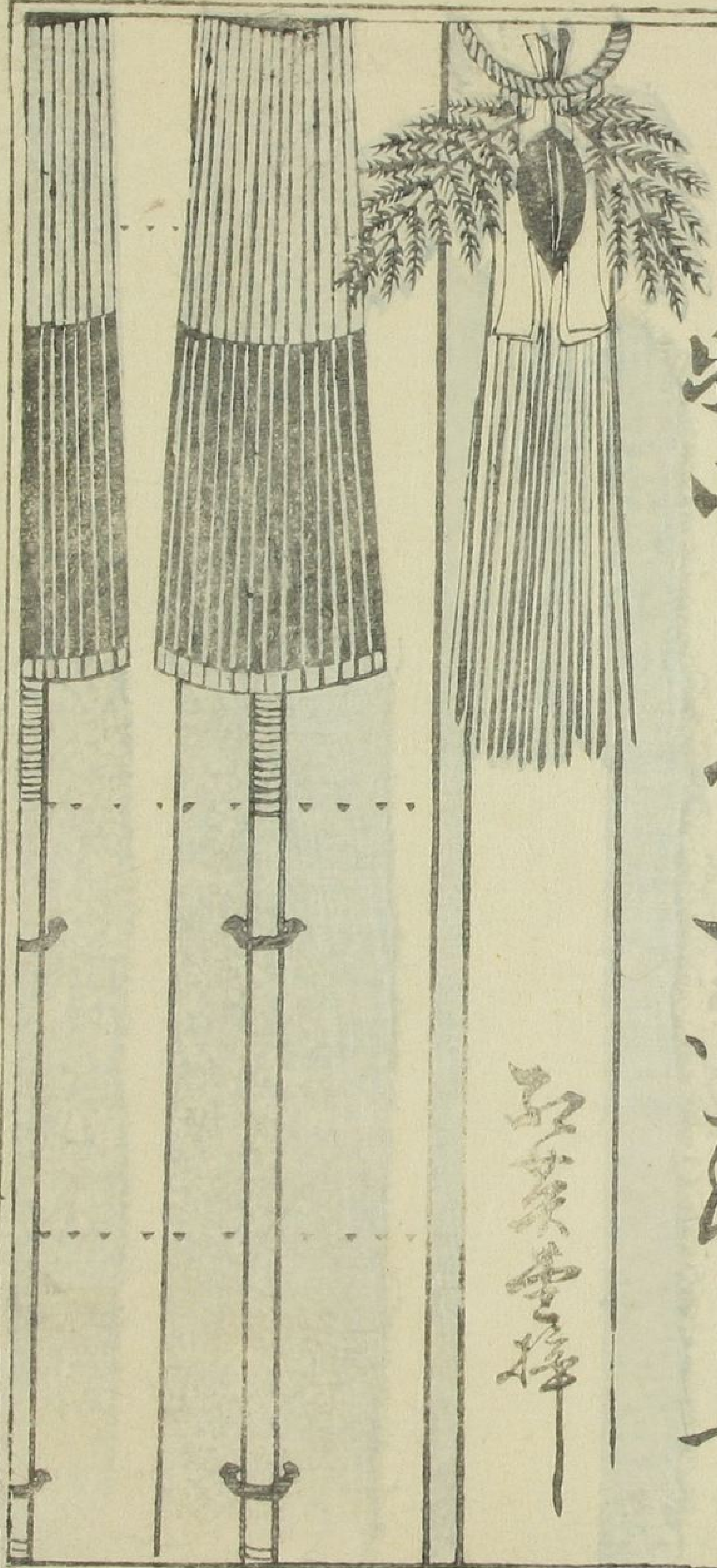
十五個 ゆくてさく系めんハ
つくてあひ[illegible]たまど
[illegible]
やりんとあのかもやかまよ
[illegible]
十五あかけまでりへ
[illegible]小つかあつ[illegible]て
[illegible]戸だちの小ぶん
[illegible]
すゐのだんあ[illegible]
[illegible]
[illegible]だんあ[illegible]
あやかもしんあのめ
[illegible]をつきて



[illegible]

十六個 [illegible]

つゞき
つゞき



大晦日

膠州筆十四編の上

山東京山作　国清画

八十八歳京山作　寿蕙書

國清画

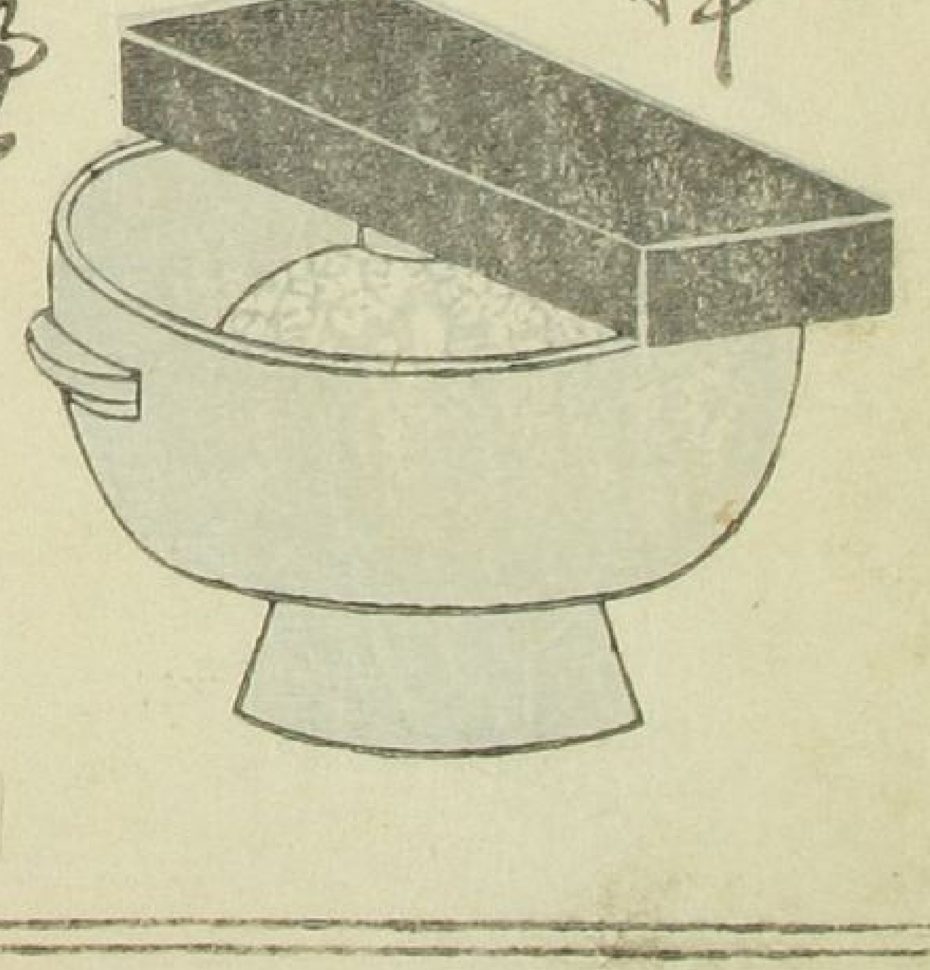
[illegible]

京山作
廿四編上
廿四編下

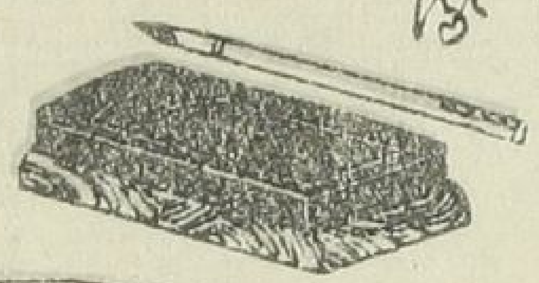
大みそか
あけぼの
さうし
二十四編乃中

紅英堂梓

山東老人作
芳清画



此冊子
かきはじめしより
筆の
[illegible]
[illegible]
硯の海も
浅からぬ
[illegible]
[illegible]



大晦日曙冊子廿四編脱稿欲置筆又謂嗚呼吉哉故題狂詩一首以具笑云

老衰追日作無工
不知流行近百翁
催促頻来本屋使
新板歳々不待春

丁巳春
八十九翁
京山

安政四年丁巳
仲秋稿成
初冬発販
東都書賈
紅英堂

○紀文大盡
大磯の娼家
舞鶴楼に紀文
大盡追儺の夜
小粒金をまかせて
豆蒔の圖
○宝井其角
晋子

大晦日曙冊子廿四編發端

今ハむかしかまくら
将代のころ
さすが大いそのさとハ
まひつるやのへやもちあふみ
うらざとてよびそ〔〕のなど
廿四五のとしやわかきのあけるみ
などちしこあろうのつとあがたて
廿七までをわんきのさだめと
まさむかしゆのまゆかるると
あ〔〕あうら里のききとふ
将ならとて廿七八男がみ
中ぶんなくおまけにこるが
よくそぶんどなござ
あるうちとのげのみあらぞ
さきせん由六三ぐでし
みな琴みあハせるきなう
ぐりをむなた人ハあれ
まで〔〕どころある人ハみなえん
どのわらざることげハ由まれ
身がのそねとまやをまハ
ゆるゆありなりこのげハがある
由あふつなあひがひろく 為口演

二ろんまの紙とあり
あがらのみうらことせ
[illegible]
自ら[illegible]
うちをあけ四ツまへ[illegible]
ことの戸をあけ[illegible]
[illegible]
不埒[illegible]
[illegible]
かくらざらしゆよびく
[illegible]
きうころちら里が[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
（一）

（二）[illegible]

[illegible]
まつ左国史漢のたとへを
[illegible]（三）

（四）[illegible]

浦里
時次郎
二段

つゞき [illegible] 年 [illegible] 秋の [illegible]

[illegible] 徳太郎

二 [illegible]

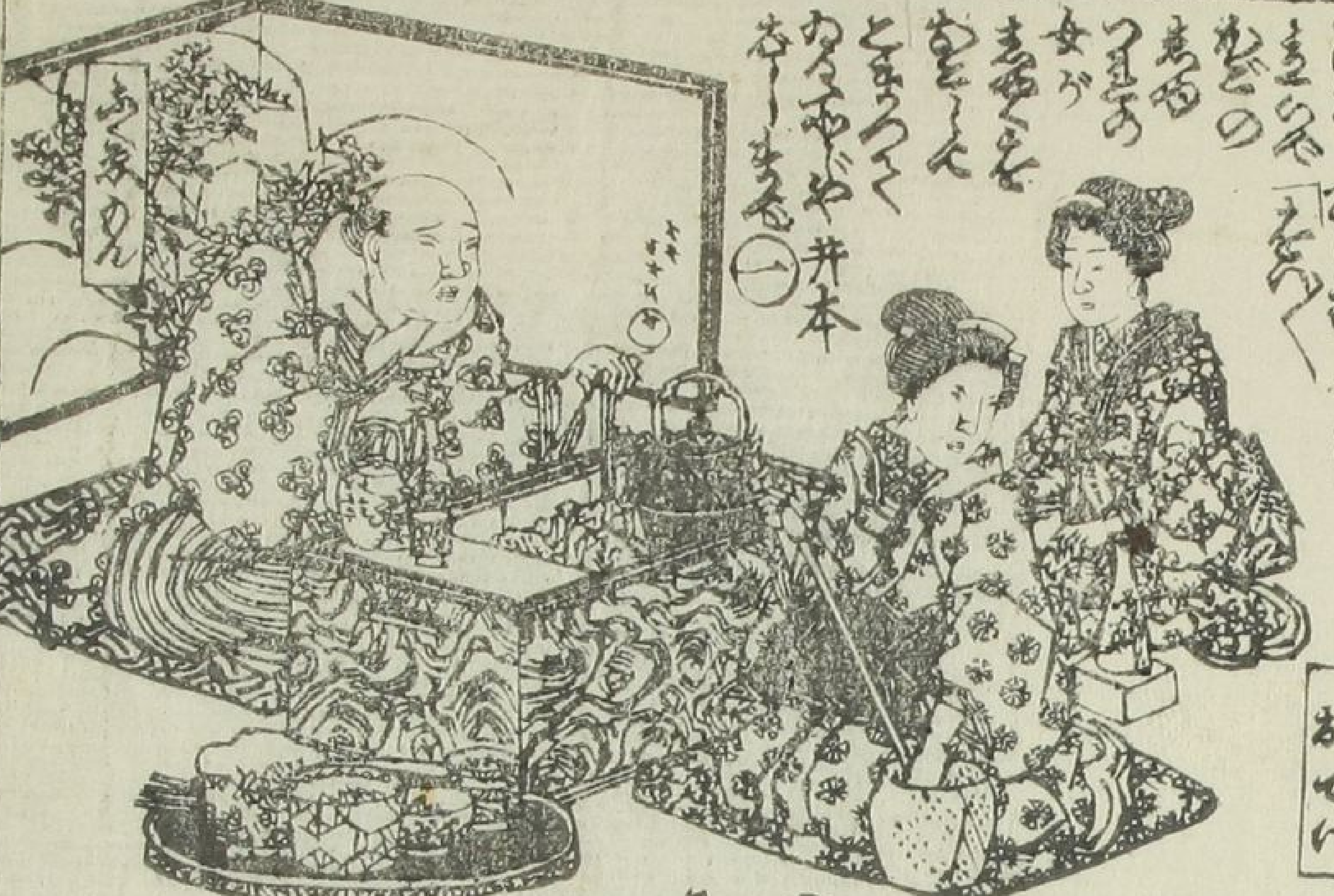
三 [illegible]

四 [illegible]

五

八 [illegible]

三段



[illegible] 女が [illegible] 井本 [illegible] 一

[illegible] 忠兵衛

六 [illegible]

七

[illegible]

四段
五代蔵八
次へ

室井四角

つゞき 吉ぐま
とのかゝり
かれと女の玄関
まへを二人紀文八をまねと
なるより「ことまへくそくまつ
ぬしよれさころへあひましさ・四角
うちあそこるへまゝ「ことろくくとかゝり
来のさくおとく・そく「なや四角
その玄関へ
おふえビぶつくか
・紀文「ことへ
今のやうなすがたさ
まくトやそさんれげと
おゐやたく大七やおかるを
あげやうなア吉ぐま
「さあそうく候ぜんへ
ゆうくそうかなむとい
とくおつまさあひ念さま
まゐせとかきなくみまぬめ
ら五天七大つまぶらつろ

五段
かくて大それやや
まそうりうま代
とまつ大のものそをなを见
る人へと紀文をくあまらなをそめ

大のそとまひつるや
の名文八重菊

案座へ
なる所

四
さつと大さくらひ
幾八ほ
ゝらひ
名がう
ひとえな
るぬかく
でまきく
たちさう
香寒とゐ
人くくく
くくめ
きつざ

六段
かくそ紀文
さくおふをはじ
め四角吉ぐま
をつまし
ゐます
おかゆる
かゆかは
やそおろく
けさうかしゆ

二
さうさきぜん
「十九のむすめを
紀文さんがあげるへ
ひる
添在を
まりひさぶ
あゐうる
ゆうるめの
日まきまで
とへおやつる
まへ・紀文「これ
さうしやう
日ぐまよく
おやとくへの
きやそめ
菊おに
むつ

八重菊さん
かう女郎
花川

かとじらく六ぶそのゆつま
ろうそへ代目八そんぎ一挺く
よかひ「ことそ幾八さう
ごんおへかまさ念か
ふの日がまとまでゆゆへ
かどふのそでみゆそく
ふんまゆえがまきえんへ
きあらアたひまとれ
吉ぐまあせさへぜんゆゆさ
ゆの川そとへト之う
よせうるへむく万うぶ
やとへのさわげしそ
まだなうの二重
一重へとへのきう身
二重へとくへやのまま
あつさうやか菊八ほ
まゆそのくそれば・紀文
「ことま幾八おのへやふぎうを
つまゆそうくへつ而く
やかえの人中了ぞのむすめの
へさきゆてかのさ菊ぞそ
あしトヤさねまう紀文が
むすこどのゆあづう行さと
らへもやま四角へのかんや
一

百も吉ぐまうちで
あそうてまう幾八
「たまくゆひろうとおちくまつみそろの
さゐうあらべとおとゑきをさげしとき
まくふあつるふぎうのきゝ身へ
ひとのをあやそまれそがつくまゐく
三

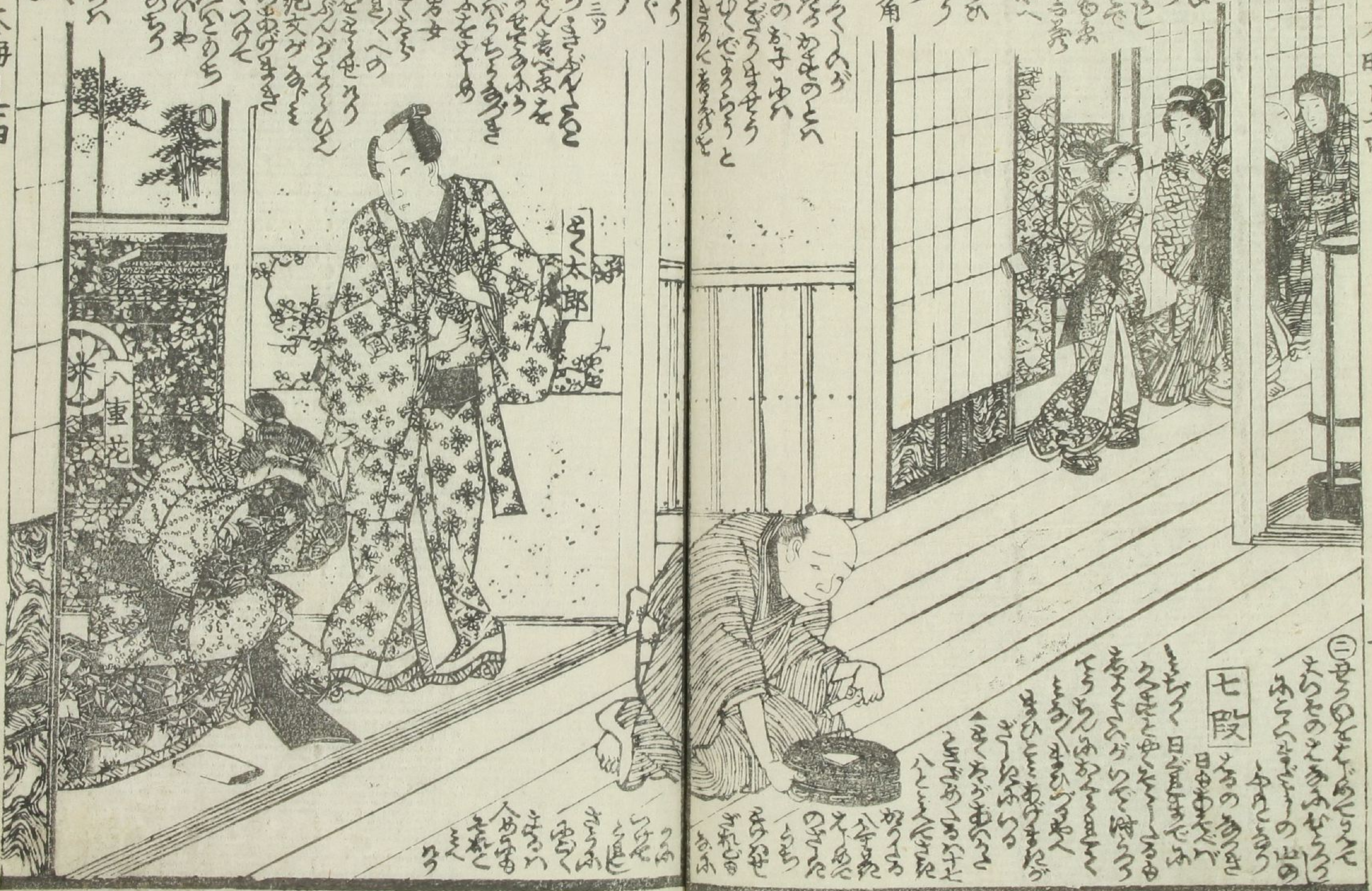
それから後のやそをく
そりやぜんたいぶとどめしは
あいふえらでゞ「とまへ
あんやの吉ぐまやよ年く
からうんへかさまくせ
中せ・紀文「書ぐま

さうるつ紀文が
かゞまの家内へ
みやくとらう
いまをさうつ
ゆそ今への
みだちひら金
ちるさくろ
金らふ
ら表
ゐ
ちひ
大らそ
の人く
ゆて
ふの
この
二人へ
の女

つぎへ

つゞき　まつちや
とよねじふ
むかひ「とまき
まゐらとの
むまれとなりて
たらいそそろ
あまゆのゆう
ぞれるむすふし
のそろのまにて
やなのひし日参
つまえまでまうち
がまのひづる人へ
やくあらん
むまとのあれ
うるさてまう
ごまぞがあり
らちうち・四角
「きゆうき
えさの人からくしのが
あしまはまだうかまのとへ
隔みてひとのお子ゆへ
八まうでとざうはませう
・紀文一がむくでようらうと
あひうきをさあく音なをを

そうらせうち
△かくて人く
二つの人あり
きうがさ二ツ三ツ
めぐりそのち・きさぶんなと
めち二ま女ぞん吉兵衛を
そなえよびよせるふう
さやれりまべらちうるづき
あまりうふをとそのめ
めくりひの男女
のそこを人すくえち
ようとそそ見くへの
とまでるまきぶんがそうやひと
△ことまより紀文が有を
まひつやのあげまさき
なえどめきてつゆそ
きうりきるたいとのち
どあ文八女がへや
みどあひげのちう
をそうくの
めそは日どうへ
わとはきさく
えらとの　㊀



㊁せうのをそがめてうへて
大らそのさまふむそろ
ふとへんまぶちうの山の
ふれとまう

七段

その為のき
日由あまべ
まちづく日が見までふ
久ませとやくそくしてるを
あそくさんがりので帰らう
てうちんふおくるまてく
まあくまひづる人
まひとまあげすれが
ざうねふる
△まくおがおへさ
とざめくるかすせ
八ととくへさ紀
かうさろ
八まうち
そとめて
のざうた
らち
そのやせ
ざれじ日
あふ

八段
その二
つゞく

つゞき
八重花
三百両
九段
四日のかつけ
四
二

花川
四日のかつけ
一
三
太郎

安政四年巳春

八十九歳 京山作

國清画

金三百廿五両

つぎき

[illegible]

大晦日廿四編下巻

〇このさき八重花 [illegible]

二

[illegible]

つるき あゝうるさ 花のちかひとく ちからがあつと

一

四 たのんでざんやうたちつくる をゝ八重花さんめ まうく大らくその 大門口 五

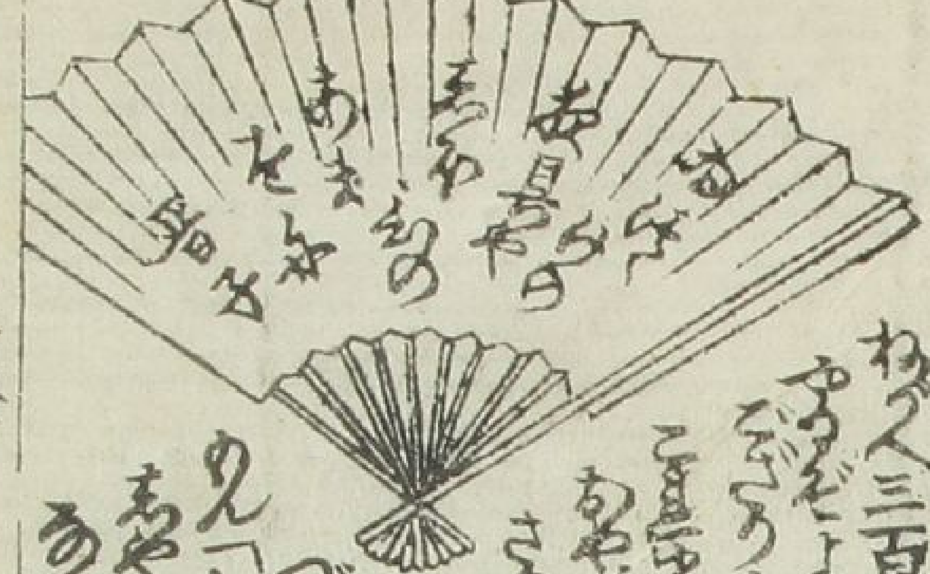
二 まつらざきた ひとらくいきさもとつあく おすと の女房の家やのちへ西江を そうへ「花のちおあの丁来へ・みく表のんおくきこえてせずとへ ゆらのみがするをまねるかうへでよ とかもさてよえうちょうつかさをあけらへ すくちから花のちよりのぞくかららをきさみ

六 までおくのりのこ夏を見くく人 このころへてめでのからききま めぐらしのてとやとその ひやうたんうつらつきそ ▲このゆで付のたそへ ぎうあるまでふつぎを ちんぜろと ゆ人

作者曰 ○此所の八重花が ぎうと名く 紀文申 みくおうと おちあの ざつ紀文が申て 古あのまた 紀文がおわれどこれを のそらむ[illegible] の入且両かく[illegible] ある申表四角たる をあつける ある

「あやまりのりきすゝごめん あさましくさされ ませ・よく夜のんごとを つかならお茶をあつかう「ふアねますえの 鈴のかもぞれがと見やあやさうへの あゝいまぎさまより おまかせして 三十日のみつけ不三百両のつひたえ 八重花〈十五両花川へ十両かまわず をやげ花のちのうちできそろう・よく太 「おあのがござりますえ・よく夜めん 「ゆふからまてヽか申そへ おそびさらずの日のくへて わづか三百両でてヽまへまき やるぞよ・よく大「あつぞうよ ごぶつあまえ

室井四角



こま申四 おおもち さあへ か さう つたを・あゝ よつかつ ...

三

二

十段 ちかそよの中 のつるのゆそ 二大の天下たん あそびて よさまだし あのおや のく うらそとまつ かきをを 五

六 さぶべぜそ やどくなうつ つあつうた よさくなうの てまのゆうを つけまへ やうら退 やとおまく 又下ねから 今へまみへ がるあを

つゞく

十三

二十七

八重花
花川
十一段

十二段 紀文 大尽

…よく花川「…」と三十日の…三百両…紀文…

との夜ハ…四角…

十三段

…八重花…三百両の…花川「…」…

十四段

つき みて ゆるくあるき ごろうさまそぐに おまけやまはおへじ もあるまゝうちと おまちあるよ ㊀

㊁ まゝ 吉や家を あげやせ「いゝくゆへんじ」 ゆへおつらびまぜね うけまりをもくさへ まへてもうらん大四 あいのうまへとうけ きのへかくのけりいつてまゝで さ屋八重義がぎうら人をけられば そくもら口上がたを主兵母の勢で つきへあふやらんとのあゝくひゝくれ たちざんの小袖えかゝ小ちりめん ゆめゝこのんつきあまりあかちりめんの下ぎの小袖 かりあかの下ぎかび二ツきもち二をへ白

えがくへの下おびあたらじさのあり三十日かうけ やなきやへの小そでまでのいやをもさる母の さくうくへ小まつへるそくおとゝろへ あやのありがさき外にしきりそのさとう あゝなぞのねゝとあるべしむまそちのとうゝ いへそへよくあぢうひあへにあるまかいう あさゆちらんつるをとらるべし

十五段 三十日のかうけ三百 あるさぐみのうや ゆへあへくゝるをやむ ちくまへ四日のでけいうへよあるや せしたる 小ぞんの㊂

茶屋 女房

口上 此ほどみ一ト いくめすあ人 はさけつてをり 十五日 かまのや やどや 東ゆや 金

㊃ ひゝろふで三日目に のちとうまひでゆめ うらへ二日めぎらさ人の つきまへのさとの㊄

㊅ あゝひさそ あれがめの そちらが この日は 勢もま あらそも さへと まつ あや ㊆

㊇ 大ぜん うち より おなで いふとて さまくの

けのづし もふてかへ ゆきのあそそ まの日おりふし あれのさへとあちどもあへく あらそつくまへくるまへあるさのと あかのうかゞ一日ねてかゝ道に ありつかの おきやをま おかし よりかへやをまじめにつゝく

でき 八重花ゑ吉川と[illegible]

四ツごろのあさ[illegible]

[illegible]

上下三十人[illegible]

さて又八重花ハ[illegible]十二首の[illegible]

[illegible]

きまく三人[illegible]

八重花[illegible]二十日[illegible]

[illegible]

十六段

[illegible]

① [illegible]

② [illegible] 八重花[illegible]

花川[illegible]

八重花ハ[illegible]

③ [illegible]

四 [illegible]

その二

つゞき やぶかとひ
あくまん又四ツ
八重花も花川も
三百両の
[illegible]

十七段
[illegible]
「[illegible]」
[illegible]
十日
廿日
[illegible]
下女
[illegible] ㊀

㊁ [illegible] ㊂

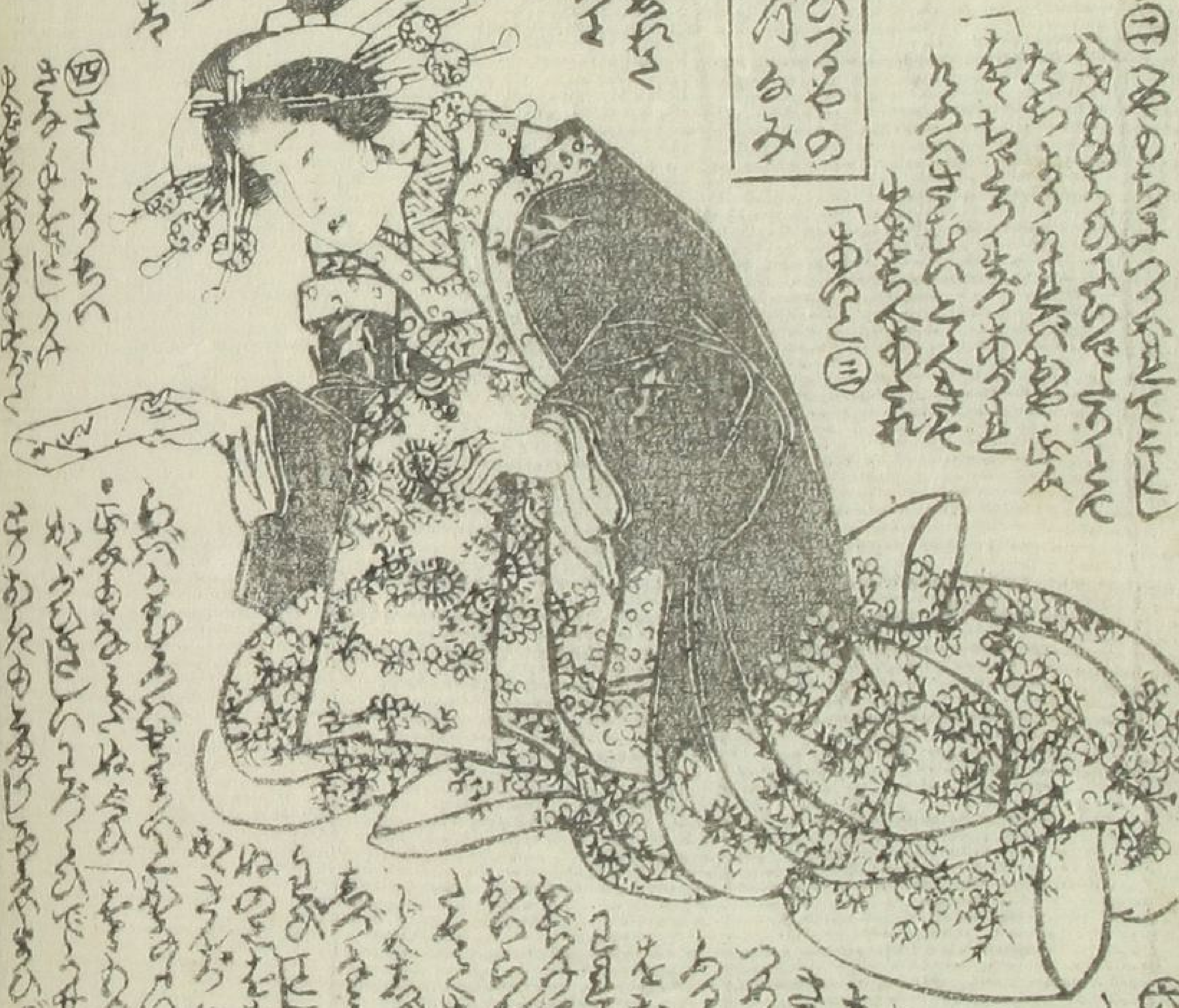
㊃ [illegible] ㊄

㊅ [illegible]

㊆ [illegible]

㊇ [illegible]
三年 [illegible]
[illegible]
上
[illegible] つゞく

つゞき [illegible]



㊁ [illegible]

㊃ [illegible]

[illegible]

作者曰く 廿日の [illegible]

三百両の [illegible]

百分二両廿日の [illegible] 百十七両

[illegible]

荘子曰く [illegible]

十八段 [illegible]

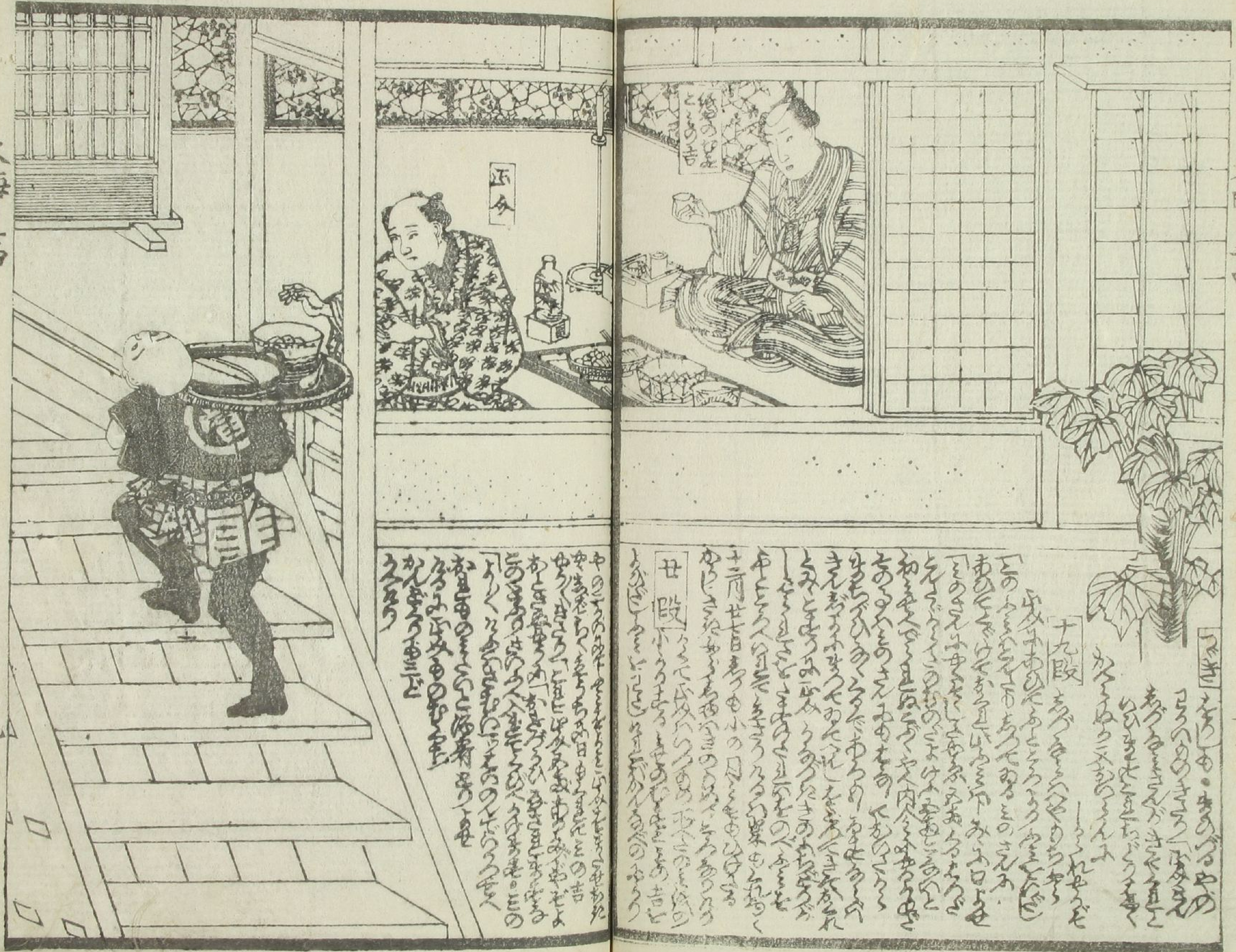
[illegible] 五十六才の男 [illegible] 百文の [illegible]

[illegible] ㊀

[illegible] ㊄

[illegible] ㊅

[illegible]



つぎ

おきし申・きのぶるやの ころへのきさろへ「ぶんきえ あがるまへんがききくまでと いひすてとまたわぐろき着く かくてぬこ人かのさまんは ーーられせうぞ

十九段

あがるまへへやのちやう [illegible]
「このみへ [illegible]
あのそ [illegible] このさんを
「このさん [illegible] 日よせ
[illegible]
和 [illegible] や人内 [illegible]
[illegible] このさん [illegible]

十二月廿七日 [illegible] 小の日 [illegible]
[illegible]

廿段

[illegible] 吉と
[illegible]

やのこ [illegible] の吉
[illegible]
「よく [illegible]
[illegible] 海着 [illegible]
[illegible]

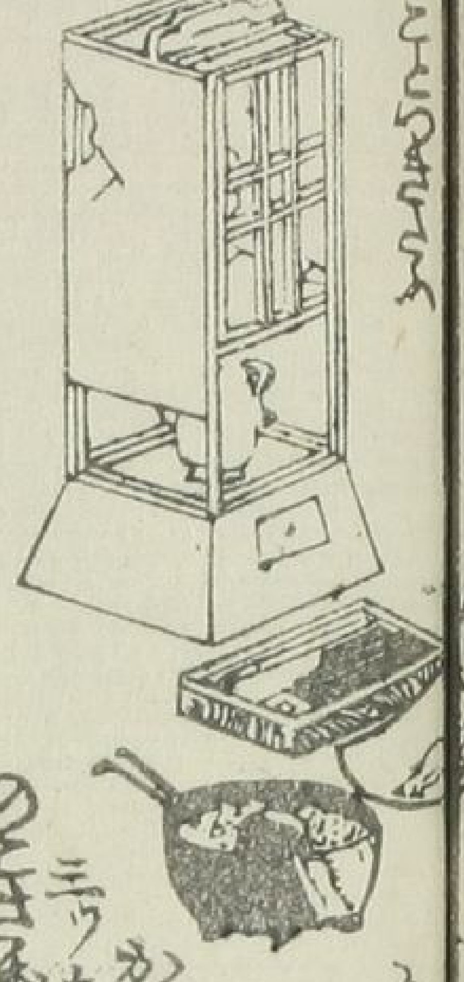
廿一段 かくてふみとのかんざしやもゑ
うけ子かどのがくおちやうちん
さげ大のぞく
かなかなの㊀

㊁きやきぜんみすゞそ
あれとゆふろあべきかごやののさる
ちやうちんめちめつたあそつたのめ
さまださるまくつきさる女中つくとおき
あぐりきえよるちよおちちんてんまで
つえぢよぞそあろとろ
四五丁ゆたるが
さうのみなきつき
さぶりて
つえまでいひゆ
むえうびろ
ふりむきう
てん海ゆ
きぬさし

㊂らねの宗そおあ日どの
さうのうえまぜんさうく
むあくさうや「かくり母が日
うらあえふんみさうゆうひ
からぞくどにてあの中の内を
小くびうまなげまだじやん
ぐみまりじがひとうてよみ
「日どろろうむまあを
かあのかづでゑ日る本の本づ
うまをふあまがけ日えかなう
つ本くでうねとのあさうね
とらうとだうくまのもむと
らみさうゐのつひまちで
わじめ一とあらなる日を
まちかとん二日もえが
大きぞくらそくへのくみんへ
とそもでたねあのあゐる
をとろみれ三百両のまへ
ぐるぞかつげさむまとゆ
あゆ又わこのふろがでうちを
ゆふゆのゆうみつくみ純文
きんあのさまさうへみ本めの
か日一ふくのさむとよ由
かめゆまへとそとで一で米を

㊃あのとかさまづ日を
さんぐまちでどぶる
るえ上よきまう人ぶがれ
むまふくぎ「えゆく」へじの
まめの子まっと今ゆうた
まだトつうひまなえ一
ごまぞうけ日まどり給
ひそたよせかたおさうくて
のるとそえ人むきをのの
ちうあるてかさのまくが
かれおまさをひらく
かくまを・ちゝうずれ
うまふめてに」のあ
をらぶ一ゝくさん
お大入のおあげん
とわあゆひあめう
てさまあ「く下らふ
「まてまでりかぎ
ゆめうらま日の
ひはうかみその
あゐうあがとの
おきあくう舞ア
らく人とらとひさく
ごれおげまを

十六 七



うみあそとらききえ
されさる
ふとざ
てまを
うろね

廿二段

きつとれはおやまあがう 口上
江戸京橋銀座一丁目京傳ニ而
・男大さんや女えらに薬ねりも
うまのるえ懐妊丹一包五匁まで
二匁五分・男八から女の月さ本あく
どまよんまつよくし女の月やまる
うちあゆるむらみ合之・薬あひと
まつまあうらん水晶粉百三十二せん
ひぐ為中やけ切まがかぶけ中ゆあえ
腹ら中みらぞらうあるあま経
ゆを由玉のひろうををあまを・大人小児
おまうの薬ののかぐぞをよくまあ
うみ合一匁五分どくまよぶらん
読書丸・極上あくねききうさおし
ろのぬのやうち五十あせんれうへ
らぎさ用ねかぶひ上作
本文にゆめかろくまゐる百一㊀

うみその目ぶら一でせり
つるとさ一のくま二まね
うるへ人のあまくいとら
うえへこのまんぞのるべ
かまくうはへゆぐぶえん二ッ
三ツあうきざんまでちうゆ
のとききそみあのうみまぞ
ゐをさのくとえよ一るが二あ
ぞうらみれるうるまぬの
おゝじよるみのうけをまさてめ
みあのうふみまくぞえをのぞるを
うさまにとうきおきれめのに」
かげあちよまろよろういゐの
そまらけでもよふぢんあゐへ
むまあちぢうまてきんぞうろぞ
たよろ一やとをききまぞうろみ
おゆめのみうけあちつまさと
まてあうがどの本うみろくや
あろうどあるてねご以であそま
ぬなぞむどうぜんとてのかるまをろ人
まぞむづやのうちろのぬのう
ロゲうりとあげ「よぞ正めぞの
かうつぐうきらぜんもきさ
まをどかどふめかちやうが㊁

おうく。ちどり「とて
まんうゐんでかつまゆん
まを「まを 宜しく
ぞいへ今の日ゆのまれ
今うろくかふつくつひ
みやくまうかでかよ
うちあうかうみゐどれ
春さんゐ・ちどり「つ
ひのまうよう一みさんせ
おつるぬがとてみえんと
あゐ「あのみかるぬがト
まかげひらく かを
づてぞうくよあうる
ゐとはつゆ正ぬめびつ
くり「かりく とうや
ぶう上ゆ。ちどり
「まそきんとえやの
純文さんが手し
と一の面
まるぬかみ正でと
かつかをまう
おさんしさうろ
ぞきさんゆめゆうち
とそへま 作りん

二十

國清画

安政五年午春 八十九歳 京山作

つぎき しのけてひろひほしこ(ゆきよく)
きうらとかくよろこび豆の
うちよりひろひかぞへてまゐれば
山ぐちのちのゐろかゞみ三十ひろ
合せて金子七両二分ありこれに
二両二分の大晦日その日ぐらしの
ふみぐむきめのちぶつきより
まゐらせう手紙をひるでそうらく
かろきうみひえさるの親のやの
ふぢ紀子の孝行うつとうてんさう
き親のあぐまうつり
▲あるそこふぢ紀の人きのあたまゐべ
又ぞあるそのゞ見まるゝこと老
京山八十九歳まで世でにさろふ
ふおさをまるろうるむまあうとあ
人いきりんきうのさにちあもそ
めでたく世をおさまる天のめぐみの(一)

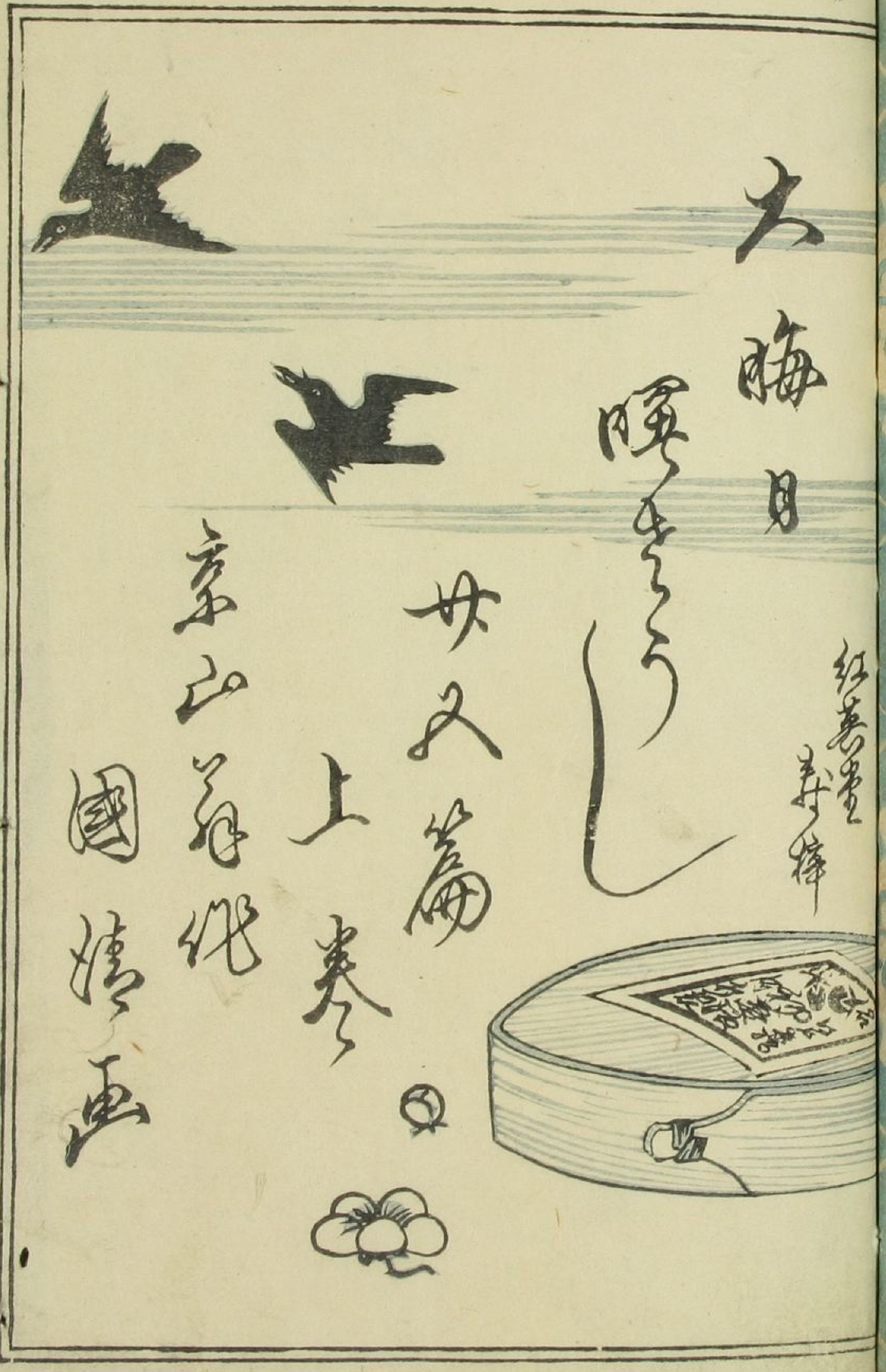
(二)そろだんきろうみちずひさる
ゑ臣草ぎしとてだうみ
世をあくたぶすめでけの
きぐくみて母のかんをまもりて
丸のごとくおとすべくまの
ふみぐふぢ紀ちょうが
孝行ぎぞうみてそろうぞ
おやのろうんぎを
まもりさるてんの
めぐみよくおぼ
そひあうで古臣れ
お身のとみ
みうそ
めでたく
めでたし
〆〆〆

▲歴世女装考 京山作 かきがねの本
神代より女の風俗のうつりかはりと和漢の書を多く古図を出してさとし安く仮名づけにした本 女中がたへおたからになる本なり

安政五年戊午歳陽春開板標目

大晦日曙草紙 廿四編 廿五編 京山作 國清画
八犬傳犬の艸紙 廿九編 四十編 仙果録 國貞画
佛櫻戀白浪 三編 四 春馬作 國貞画
新當織帯屋絵合 四編 五 西馬綴 同画
歌討嘩古市 三編 讀切 種清作 同画
頼朝青雲録 全 春馬譯 國周画
正成誠忠録 全 春馬譯 國郷画
新田足利龍虎録 全 同譯 國明画
歳徳曽我松嶋臺 三編 讀切 種清綴 國貞画
鼠小紋東君新形 三編 讀切 同綴 同画
入艤倭取揖 三編 讀切 同綴 同画

地本草紙問屋 南傳馬町壹町目東側 蔦屋吉蔵梓



大晦日曙さうし

廿又篇　上巻

京山翁作

國貞画

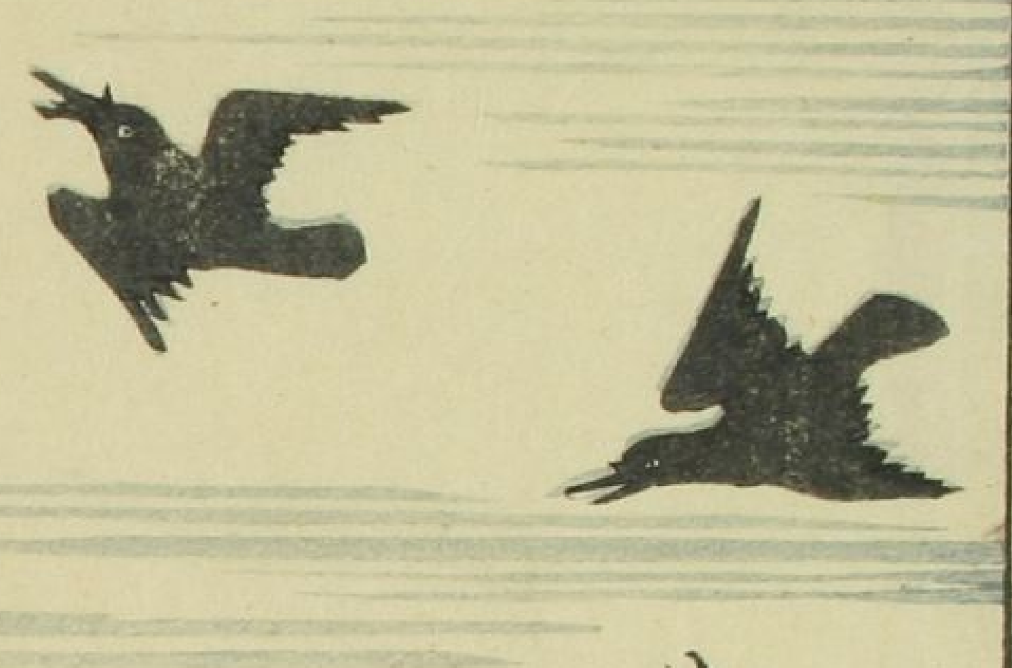
紅英堂寿梓

大晦日曙草紙
おほみそかあけぼのさうし
廿五編上
外題 國貞画

山東京山翁作
一樂亭國清画
廿五編下

おほみそか
あけぼの
さうし
二十五編
下の巻
京山ゑらく
ふた績かく

於恭 文序



○よみそめ
大ごもりの作さうしのたぐひあまた序文あり
蛙絵あくこれをみてよろこびかゆゑ
世にふ猫のあつぷやあるてもよし
あるくにものあけおさきぬおこるに
かのうゑの一さまるて蛙絵とゝ
ありぬ▲ある日のづゝこすらえぞ
しるこれを京山へとゑつるめの
人あまくめ入りしものめしつゝと
丁稚京山の書齋へゆき
きりまうりそのつゞきの
礼紙ゑ京山ぬしぞの人
ゆるまてゑあるれ女の筆
さんゑのみのりふろしきみさ
さの京ぞあてゆてしきその見り
ひらきたきまぞべきめんけいのあるべし
京の赤飯目録にさうし今を試るに▲

▲こゝにありてこれも女の筆をのりなさつた寿の続手切
ゆく●一筆中へはいさその懐妊丹の引めし上りしに
は天晴菜様の御誕生ありし今日御祝儀の赤飯
さきがけて目出度さくらしこれも
若さんするそこれをたんとつらく
残念制家懐妊丹のるのを用ひし
ゆくはらんじめでたり御安産
こゝさて御男子様御誕生の
あまり老女ぞその
たしひすて御祝儀なる
よりの御つるひとくつる
またしも御帯のんようひ
るゆくひとく
あらたるあるひのよふに
ゆかりあるまきあるの取も
御ろも売れざるれ礼
中よくべきよふ

用ひしてゆらんじくのるとき
おりくべく子を売りして
九十老の京山若君さて
寿を祝する言のは
○何もうれしきにも
御寿命
これぞ若君の
千代へ
いく千代

㊁あやまの
さそりもあく
おひてらや松ふる
たねとしてその 匠
かく寿ひ
つげるを
売りしく
此用ひしに
かんのるのある
つぎをふむそび
をくるふろん

安政五戊午弥生
九十翁 京山
○右懐妊丹の
わけくすりの代へ
一ざのみくすりこの
江戸京橋銀座二丁目
京伝ニ而売あり

大晦日あけぼの冊子廿五へんおわり

「稲刈(いねかり)で天地(てんち)にこたへる事(こと)をへ」
とれむかしの人のおしへてあり一ツのまへま
百しやうの身にとりてその天のあめ
風さへうちつゞくらねがふ本ぶんに
みのりくるをたのしみとし
たまへ穴をつまう
さまたげねんで
やまさ一つく
むまへ御恩をそそ
きらの一ツめ
あらくしらくく
とれるそだふり
ありてわれんぐに
つまりのそらむ
いちのまこ子
うべてちの
ではやう
あるめ
事く ㈠

㈡ そのかはさ
いやそなり
そうんされば
わのことく
中日あく
子とらさう
ゆへかされ
ねとりへあり
むぎしくかま
よりニりまでの
ざいきそうねん村と
いふ所に百しやう むぎ作
長ぜいにて千かうく
しうもおんあり廿七八
とうのむすめあありて
かよねとのこと
十二あり子ども三人 ㈢

㈣ ふしの水のきき百しやう
けぶりのそばきしんぐ
あてもあ二分のねんぐに
つまりあるそばぶの
あらの子きま今子
二ある二分やての又
たのむ ㈤

㈥ 作くおろくえ
あらあたらん
じんのあるみの
ころかねんどの
ごそくかまで
やくびやうまた
つきかあーく作れん
その日のひろわれやく
らあん一わり三ある二分
のとりのみもの四やのねんぐを
あるはむでするまうあれぐび中外と
ふかれたもうちあるくめりさまの
おもてやくくねがうもんと存うから
やよくくらけ合ーむぎ作 ㈦

又日ごろ正じきのむくひ
かうふとはんじやうしよく
こととなりむぎ作おやこ
ちかられ孝しんある
ゆへなりけり

二段 さてもむぎ作
庄やへよびたる
なさけ母のお豆むぎ作あね
むすめのおよねや　庄や
どののおくさまも世話いたし
おくへ一両二分づつおくりて
はつびのはれぎぬおやこへ
さしむけあらうぞへ
おのしもあんど
なされよ
さてもはれぎそなたへや
ひあつめぐらら
らうらうとあろうきさん
あへさんも
さえもひむねが
それなりとあつうのふ今に
かへらきさんしてから
ころのきもそひに
ござ一ツあげやうぞへ
うちのみ母一利をよく
きやうのさそんゆへ
おの一ぬのはきあがら

又のく卜戸ござるのぞう
ちくぞやこまるうら
むろりとありまけり
きぬむぎ作立ろうす
けれへ一日のお豆
四さ日やおのお今を
ゆねかくへとんごろへ
引まざさ庄やどのが
やかやうさむむをあろ
それは上しむぎそれにぞ
海をそこぞおよねが
うれかのおきそへ
四ろききてよその
一ぶんやらう又
あやとさひれて
おひのかかうきつかか
まあかかとをとく
のものきそる一段
あらしあり
かよねもやらく
まう入りねんごの
ゐきものよろこび
四さきさんかさのき
まやうと
さしよれへ母へ
ねろりへことこへ
はきのあまりの㊀

おとしまするひまいいつうらへ
うんどきちさうと
あつてそかりしおやこ三人
水ひくだ河ろくさむけて
よろこびけり

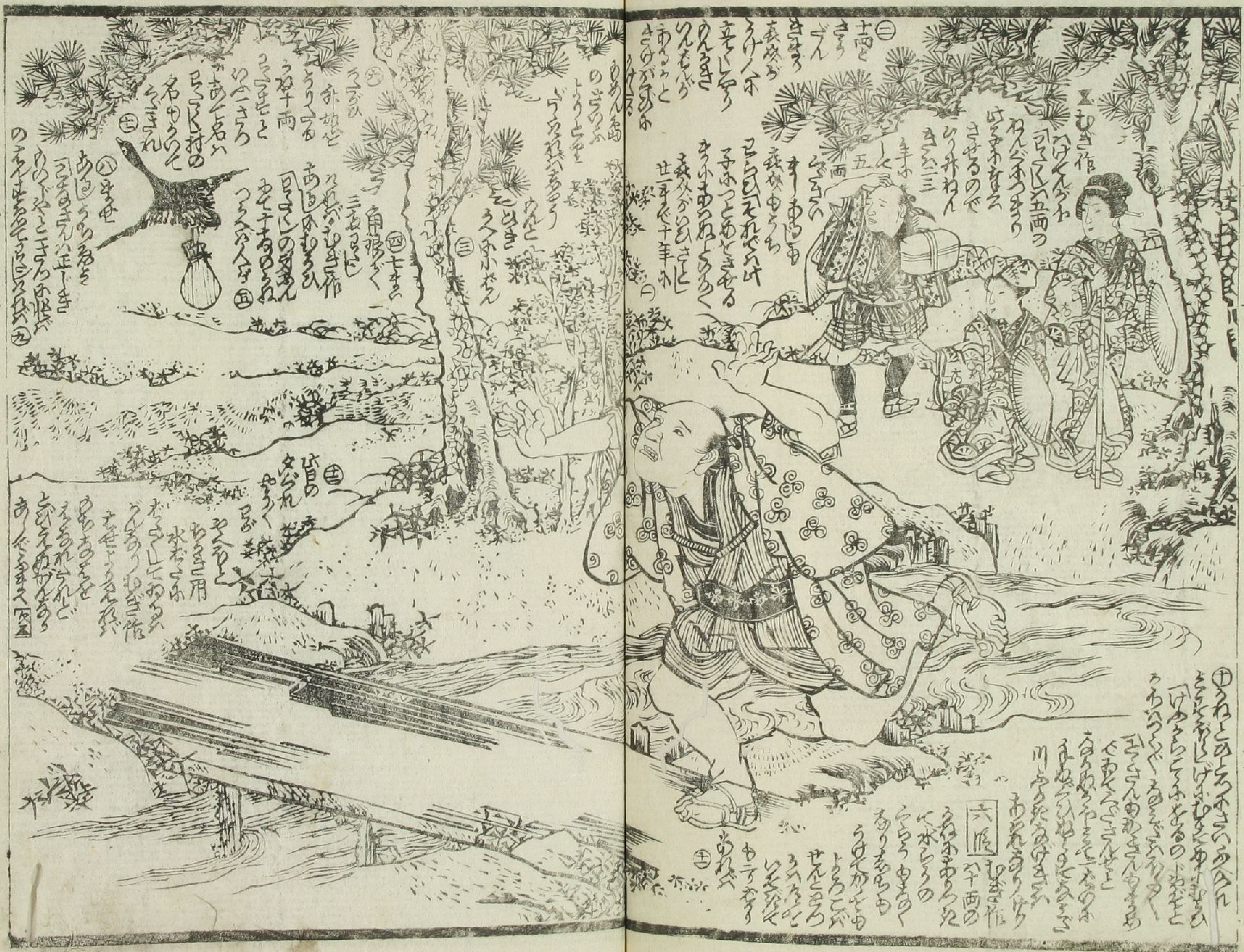
三段

[illegible]

四段

[illegible]

むき作
およね



むぎ作
七蔵
お豆
此男下の巻
ゆくゑあれる

八段
むぎ作
此男下の巻

その二 此男むかしはとかく色むすこ作ふむちひ……

㊁ ……

㊃ ……七両用銀……

㊄ ……

㊅ ……四五丁……

……村……

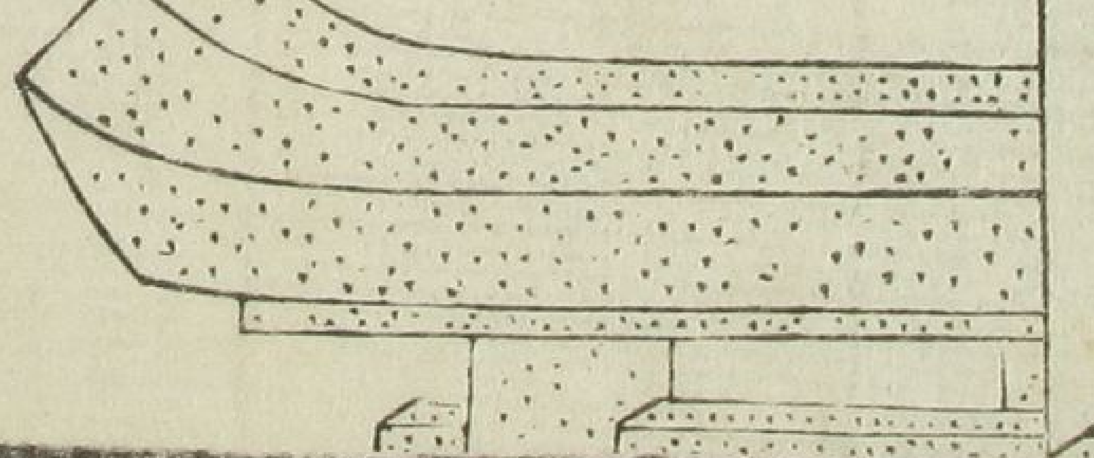
㊂

……

大晦日廿四編上の巻終

九段

かくれ ふきや むさし 内より …



安政五午孫生 九十翁 京山作

歌川國清画

大晦日あけぼの冊子廿五編下の巻

十段 [illegible]

十一段 [illegible]

篠井や
どく二郎
三浦や内
白玉太夫

白玉てゝおや
むぎ作
白玉だん志ん
白きく
篠井や
めしたき
ごん助

左より七年いぜん
白菊どのをつれてまへ
ことを
うり
言る
今十
あの
さのふ
がんぜ
さてそれをまへを
きつねん村の
むぎ作さまを
おつれ申されし
まさかそのかわり
とをおかくしあそばされ
そのうへむぎ作さまへ
おとつさまのおさへもれさ
おとうさまのふとおかくし
おまへさま今日の
おまへさまをたまわれ、
おまつ今ますそのうち
むぎ作いつてやりし
おとこおかへり
升せう
▲ごん次へおもと
おさらばと
さつぼつてとうぐ人と

▲むぎ作おしいれから
「ねからこれそれの
かわかざしに
二分あれば
ごさんこれの
むすめのかね
ありがたのあり升と
ふところにあれさ
するをしもごん次ハ
どくらいはいまいひ
して立てくんと次の間へ
いそ白菊にむかひ
「四日の雨がけに
おやどのおかみハ
さんくわのおかへり
あらかくさの升
白菊「あのく・ごん次「こん
だんおへりかつされねと
ちつごんさのこめはあやぶむ
あるきさどれハおかまえの
こめ申ちかねといつされ ▲
▲むぎ作
つくづくえ
ごん次にむかひ
いりおまへさん
八段

・ふしぎなことがござんすよ
・ある人「ある日ふる雨で
「あゝおもしろ世てきたア
十三段 うちわへてやつの
ものしれぬこども
ちに言ちまうかして
おやむぎ作をとつて 下次
これてもやり升
「ちいく
・むぎ作
あまりのことに
あさん
おまあの
ことさい
あとにし
やまとうり
ごおかま
おぜあり
こう
さいぜ
からお
ろう

〽つゑ 田三さん ごぎんじさう 母さんへおよろ あへ・むぎ作「守てそくさい じやこれむぎじや つれやかゝりへ由を通して あいさつが今の おやぜんのさいふんぞおかしく くさざんもうらばおかりをと いゝあたらさへ今 あれとまの由おあれ やてられ兩おれくでん兵衛 よろめでござんさうと 札のおかくのべられば むぎ作とうさどうより でん兵衛ゆむちの「おまへさまが十文のさいふ ふへしんでさう生さ そのせんひとつよおよあや ならしくおれを返や弥さ むぎ衣のおよねと や「このは弐ら玉おやの ゆうらやおあまん返あを 孝行かうくおのゝとあの 身でおりあらら返ら からおや人風ぐの

㊁三文のおむぎやら あさけの二分とゆうらは うちよろこびて うへりけり

十四匠 四日のおかげ それへさてあきさ ふく弥やのむす子 久くらぎとてそてらら まぢらきの亜や文三郎を 福弥やのあるじ よぶゆるりけり ◆時文三ろうと いふハ福弥や とくえうの 〼の

〼まてゆておやの代ゆおまづ かどまのるかね利の雨へ 十八歳の時せきびおやり会ふおと あつゑせられ五人ありて よめ由あるまのり 文三郎へ あゆのさてくろめんと云ハちゃらひ ふうが由ありんわのかひを 茶つうのおの伝由をきる この茶のめへ十けふて 弟へ由てこうきさとおへ おりんゆ中きのの方のざる あとさせてくるとさわりのおり ◆きてふく弥や入まさうり あきじどてちめんゆむとは 「オーきうゆ用がありとへ 古んぜらり弥・「いさき ふうでおあへさくこうが ことこまのて者こう くげんいへるられされど ぬうゆむぎさ者ら乖と いかきんねめゆ おうされてけるぞ 四日のおかげ かんゆんおくるの まうされてこのさぞ 今二両おゝも ゆうてくんどうと おおひさげあく

むぎちも丈今二分がつ られ弥ゆ小のまゝあら でんあうあらくらく りんきよ七年あとゆ 弟らの時ゆおも 四五日ありてあり比さう 今てい斗へ日ころして らち切も此てのおらげと あがりのの大ごむを ありあへ久くらの木ゆ おるさてこうゆ まさるへんまゆのごてゆ おめむ「やちきさん そのおゝ返へ斗すらよい もいのトいふ附かゝの生 ゆてやてこうが「おうゝむくと よろそれて「あのくとかゝの すめいてうけれバさてこう 用い去てうとこえて 今三両小さくゆひねろ こるんとおあうかゆかれそて つうやしけり ◆さそうれるのでん兵へ 久うむぎ作へあるまそ わんこうかふ白ぎくが あうら比ゆそうおぎの ちあらゆあい酒由 のこおめむ由よろぬ㊀

此のぞなま きうよゑにむ あくのじや 丈こうきせる をまくてに ぞえ「おそら こちらのめ とも者ざく さうあがら ・どくあめん いやきらびこと あもとよきん しかれ

▶らへ とびくと さくへ のり弥 せわ まうてく おきされ ごてう ハカ一 男あう 〔内〕

〽あきさる者ら見などの内ことの
あるあさおやゝ寺行かへく
こゝろざしのみあさきてくださるれ
すゝせと者らにおかみつのわかとに臣
十二の時ひろでてよろこぶところ
おやこがてまにけるうちあわせの
うわ十あのこのかをたのむ
ぜうれしとひろいて者らまつ
おやむすこ作へへ一日と申ん
とまりて者らまかおやふうら
こまるあるつのとまらしことと又つと
めのをかた月に合三分ツくおかると
へやそつかぶさかみうらむすめ
あいろや者あくうきのをうけるう
ろうすこでぞんるすのひ三浦や金蔵
ふ者しまくうそのも臣く
そうけれどおうかそこをきて
まうみてこうの母とてかれ
てかやゆまそらゆあてまゆるお
んぎ臣とかわんるい臣あうて
文三うかむら氏囲せんいのそが
ドや今からそぞくかかごこと
とあをこ三浦や久吉こもおうらけ
しくそくこれとおろうのも青月
三百あふら臣をせのより代を
まかれつけぬいるかをせつけう
十六臣つかん此日申られけれ

これかれやよう二三ちかくとれ
あらぜ者ら見やむうれことよゑへ
やどえくべき一まづさうぶんへ
あのかれまゆのとまゑく者らまへ
ろやゆ細とあてゝ者らく
あくはそうらぬるて二三ぐ
おど三の噂やのていゆと
つれてきこのあや文三
者らまうへきてうちおれば
わくこうおりあぞくろうお
「家おこ三五めんじや見ゆ
うぐ今かくべう兵衛のう井
「のやろべくかゆわれまあ「あや
えんぞやのう井うまそら
ころらじ大ちかく
あやかかめにて者ら
まをみうけれ
きてゝわしこと
どゆうくしく
うくうけまとわ
ある人のよろこびは
ぞもふつくしくう一
〽さて三ちらやの
あの臣でよめぐくおうけの
ようとくのかの一ろ合のつまと
「あう臣ひけれはあの臣いいべき
「者ら見へ二十と一廿五両合のある木の
ろぞうの根ぞまれ千両でもあきうろべく(一)

十七段 さて文三の三ちの百両を [illegible]

十八段 [illegible]

[illegible]

十八段目 [illegible]

五十両

十九段 大晦日 [illegible]

[illegible] むぎ作

五 とんて子どもらもでゞる 由来此のそれある時 でん次立ゑへりでんおよう おせのお吉足ゑですれ お目ろけの者ちまむきる今でん おまきんろらあの一ゆうで 壱分ぶそのむんをうきんから 二朱めて二分二ゆあり(ひ)らぬ るとまうえ　女房 ①

でん次

二 おきん由 ようこぶ ことろだり臣 此金あて 二ゆちうお 三百が 二朱 百が五ゆう 四三百が

三 きり

三 よが いせ るの福 縁やふ あきち

四 三百がまあびさくくるね 十一ゆうでまちん からやへ八百のゆりそとらへして られこれの二ゆうちるが 三ゆと七百廿四文でん次 やさいとせの 竹のかうびくそ ゆーめを さろおホ一その のとこ一ゆとせよ をまへふあきて うちよろこび つ手子ゆむうこひ 「あんと弄アめで この大晦日でへあるう 一ゆうさ人がうちや むそござん一ゆう上の井の内のふ子 大くひとおくぶるとのへ ひらかべけれどその日 とじの弟ゆて三ゆと七百 廿四文ありて弟をそるろ 上〻吉の大晦日ろうぞ一こがねふ ふそくあへ人ゝこれをとそ 世のおうえと おの以中ゆゞし

でん次 つ手子

ち限 こゝふ文とあきの手 すゑうらおろき くまらゆて七あくどんと 二

あらぶ ちんぶの あれべ 大晦日へ おんそくふ まうせらく あて手を らげくる おぎ一るふ ひき こかり 二千びき せのおと ありくる ちらく ふうむ

さう はゆう を よがぞ くろい せまき めく

やまちくの あ井ろむん こぞきせ 圖

磯千鳥 京水

今井そこのあるじを
つるの[illegible]水や[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]大晦日の
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible] ㊀

そこらを
[illegible]
[illegible]
うちの中に
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
中の[illegible]
[illegible]
[illegible]
十[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

市中大晦日之圖

米の[illegible]や小判を羽根に

文三が[illegible] ㊁
[illegible]茶の[illegible]人の
[illegible]
[illegible]
[illegible]
大晦日の[illegible]
[illegible]
[illegible]大晦日[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]雲雀
中に[illegible]
[illegible]茶の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]茶の[illegible]
[illegible]

その二 さて文三
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
女房[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]井戸で
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

文三 つま
ごん次
きのくにや文三郎
金十両

[illegible]

安政五午春
九十翁京山作
國清画

[illegible]

[illegible]

安政四丁巳新春新鐫目録

童謡妙々車　四編　五編　種員作　國貞画

大晦日曙草紙　廿三編　廿四編　京山作　國清画

八犬傳犬の艸紙　廿八編　廿九編　仙果録　國貞画

俠客傳仮撰略説　十三編　十四編　西馬譯　国綱画

筆頭當板仕妝咄　初集　三袋　春馬作　國貞画

拙細工今古西行　初編　二編　同作　同画

題大磯虎之春筆　三編　讀切　種清譯　國貞画

新當織盛衰綴合　三　四　五　西馬補　同画

悪源太猛勇物語　全　春馬譯　國久画

義仲勇戦録　全　同譯　國周画

俠櫻戀白浪

[illegible]

地本草紙問屋　東都南傳馬町二丁目　蔦屋吉藏板

明治八亥年
八月吉辰
求之